家庭雜誌

一回
十五日
發行

六月十五日發行

第百拾七號

奇應丸

定價○瓶入五十錢○大包廿錢○中包十錢○小包五錢

◎主治効能◎

御小兒衆の虫のやまい○五かんきやうふう○胸いたみ○はら下り○しやくつかへ○船車のよい○酒の二日よい○はしか○ほうそ○產前產後はよろしからず

◎効驗の顯著にして而かも賣價の低廉なるは普く諸君の知らるゝ所願くは御試用の上倍々御高評を賜らん事を伏して奉願上候

東京市日本橋通一丁目（電話本局四百七十五番）

白木屋

大村彦太郎謹製

特約店

東京市神田區鍛冶町　大木合名會社
東京市上槇町中通　安川榮次郎
東京市銀座一丁目　佐々木玄兵衛
大阪市東區道修町　賣藥卸賣會社
其他全國の賣藥店に差出し有之候

德富健次郎著

青山白雲

定價廿五錢
郵稅四錢

讀賣評　雜筆數篇を蒐めたるものなり例の民友社流の筆法縱横寫し去つて厭味のある所即ち面白き所なり、訪はぬ墓、水國の秋、夏の山の三篇は確に面白し春雨の徒然を慰めんには恰好の讀み本なるべし

東京日々評　漁師の娘恐ろしき一夜夏の夜がたり訪はぬ墓等總て九篇收めて一卷の中にあり題して「青山白雲」と云ふ其文章の如く其筆光彩あり神韻縹渺として殆ど天才の域に達するものあり大作にあらずと雖も皆佳作たるに負かず

福岡日日新聞　德富健次郎氏が諸雜誌に掲載したる漁師の娘恐ろしき一夜沼山津村夏の夜がたり等數篇を蒐つて一書となしたるものにして氏の筆一種の妙趣に富み紙面興味の津々たるものあり

蘆花生編

世界古今 名婦鑑

定價廿五錢
郵稅四錢

高知日報評　家庭改良といへる事は今日の社會に於ける急務とするものゝ一なるべし此の時に當りて古の婦人が歷史に輝やきし跡を尋ね今の婦人が現に世界の四方に爲しつゝある事業と其人物を紹介する亦婦人の志氣を振興すべく見聞を廣むるの資たらずとせんや本書は蘆花生德富健次郎氏が專ら泰西古今の名婦人中に就きて其の事跡を傳へたるものにして家庭諷讀の際自から此等の名婦人を一室の中に集めて相語るの興味あり家庭の間に於ける必需の書たるべきを疑はず著者の乃父德富一敬翁此卷首に題して曰く「かへり見よ世々にかしこきその人をなしゝいさほは家のはしき木」と以て吾人の評言に代ふべし

發行所　東京市京橋區日吉町四番地　民友社

國民之友は去秋月刊となりし以來材料豐富品格高尙、眞に、政治、文學、經濟、社會上の評論として、獨歩の地を占む今春以來德富蘇峰氏專ら社說に力を用ひつゝあり苟も日本の最高文壇の空氣に接せんと欲するものは必らず購讀せざる可らず

國民之友

第三百七十號　六月十日發行（毎月一回十日發行）

口繪○虎翁肖像●懸擧筆藻●國民之友○○日本國民趣味の墮落（は紳士は待合に似たる家を造り議員は大臣に喰て懸るなどを歎ぜり）○○豎子をして名を成さしむ（は朝野の政客が大抵意氣地なく伊藤侯をして功名を壟斷せしむるを痛論せり）●時事○○内閣の新政綱新態度（外十數件）○○海外時事○○經濟時事●特別寄書○○社會道德の進化（浮田和民）○○日本の對外方針（在米國、朝河貫一）○○自然を讀むの法を論ず（二）（愛山生）●訪問○○尾崎行雄氏の對外意見○○嘉納治五郎氏○○非文部獨立談○○井上哲次郎氏○○倫理教育談●藻鹽草○○白蓮華（完）（島村抱月）○○死（完）（國木田獨步）○○石ふみ（續）（不二行者）○○無人島（乾坤）○○岩淸水○○太田玉茗○○故鄕夜感（碧玲瓏）○○夏季雜詠●雜錄○○那威の詩人（蘆花）○○英國名士評●紅塵萬丈○○L○○C○○玖瑪及び比律賓（木馬生）●批評○○眞摯なる小說―外國人（外數件）○○文界片々○○政界片々●評論○○書目の必要外二件●海外思潮○○常備軍擴張論（外一件）

一定價一冊金十五錢六冊（半年）前金八十七錢市外郵稅一冊一錢五厘

東京市京橋區日吉町四番地

發行所　民友社

民友社編纂

支那之列國

地圖挿入　定價金貳拾錢　郵稅金四錢

遼東還附以來今日る至まで極東の形勢詳悉して本書にあり

◎東京日々評　是れ實に現今世界の大問題なり機敏なる民友社は早くも此題下に一書を著はせり全篇を通じて七章とす曰く露西亞の滿洲經營曰く大英國の對清政策曰く獨逸の膠洲灣領有曰く佛蘭西の南滿經營曰く朝鮮と日露協商曰く日露協商發表前期曰く日露協商發表後期なり

◎經濟雜誌評　最近の事實に據り、支那を中心とし、露英獨佛の之に對する關係を說き、更に添ゆるに朝鮮に於ける日露協商前後の事情を以てす、東洋最近の風雲を知らんと欲するものは讀んで利益と趣味とを得んこと受合なり、

◎讀賣評　支那問題は刻下の大問題なり否寧ろ二十世紀上半の大問題たらん憂國の士之を研究せずして可ならんや本書は最近の事實に據り支那を中心とし露英獨佛の之に對する關係を說き更に添ゆるに日露協商の前後の事情を以てし議論を少なくして事實を重とせり就て見は一目の下に極東大勢の時局を窺知するを得ん

◎信濃每日評　還遼以來今日に至るまで極東の形勢を詳述して遺漏なし列國行動の跡を尋ねて極東の危機に處するの道を講ぜんと欲するものは一讀再讀して可也

◎山陽新報評　最近に於ける東亞とも云ふべきものにして日清韓三國と露英佛獨等の交涉を詳記し順序能く整ひ形勢歷々掌を指すが如し東方問題研究者の一讀せざるべからざるもの

◎時事新報評　民友社一流の袖珍仕立にして輓近歐洲列國が支那に對する侵掠政策簡單に說明しぬ時節柄一讀するの價値あるべし

發行所　東京市京橋區日吉町四番地　民友社

民友社編纂

比律賓群島

定價金拾八錢　郵稅金四錢

目下米西戰爭の中心點たる運命を荷へる比律賓群島の地理及び歷史は此一書に詳悉せられて餘蘊なし比律賓の事情を知るは西國政府對玖馬の事情を知る所以にして米西戰爭の起原また大に發明する所あるべき也

發行所　東京日吉町　民友社

速記法 自宅獨習生募集　二ヶ月卒業

○規則入用者は郵券二錢を投ずべし

東京下谷區徒士町二丁目三十番地　速記學專修所

家庭雜誌

定價表

一冊	拾錢 (前金)	拾一錢 (市外郵稅共)
六冊	五拾七錢	六拾三錢
十二冊	壹圓八錢	壹圓二拾錢

廣告料　一行（五號活字廿四字詰）一行八錢

家庭雜誌　每月一回十五日發兌

本社電話番號本局七十番

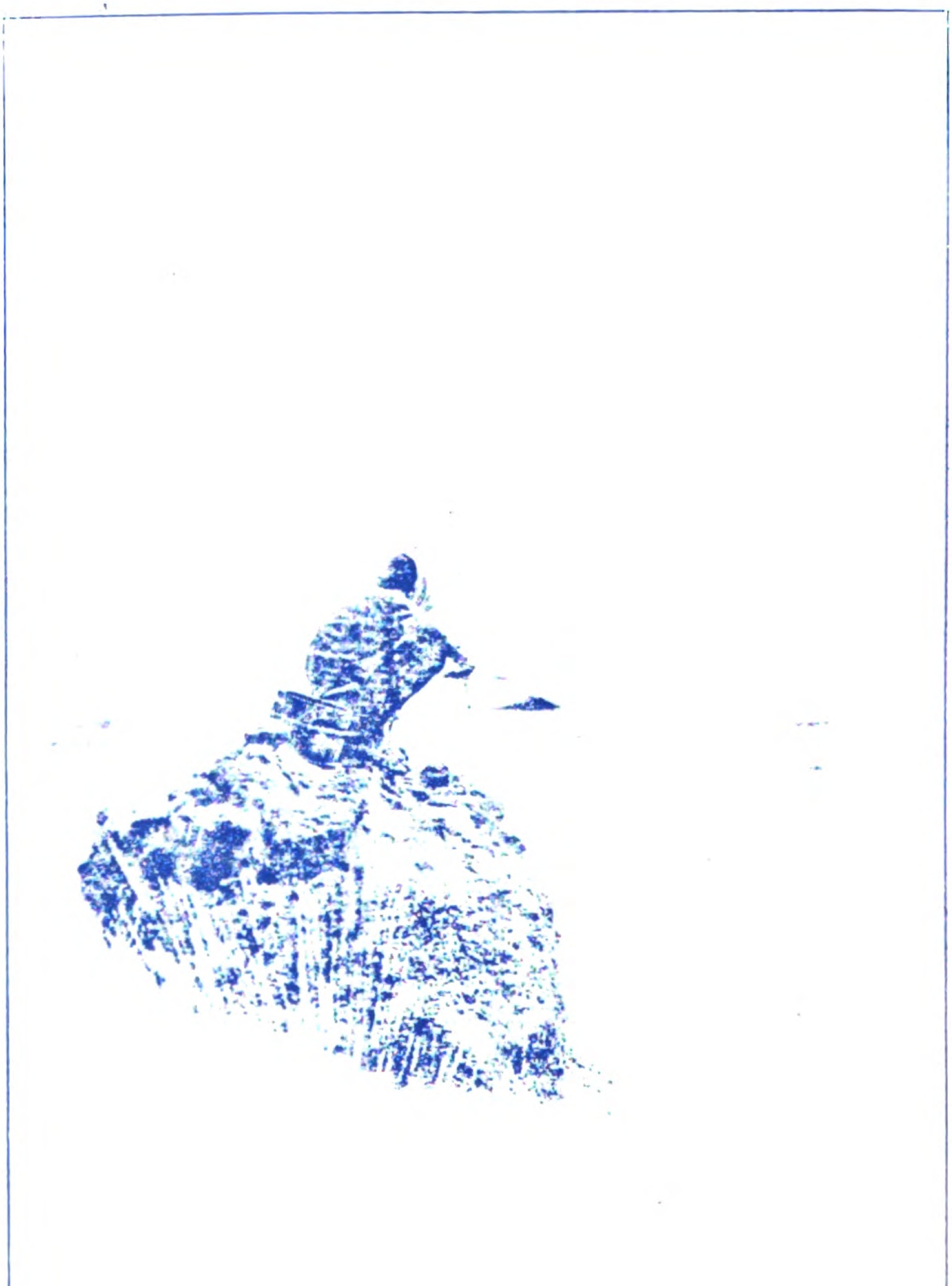
發行兼印刷人　吉崎圓吉　編輯人　金子佐平

發行所　東京市京橋區日吉町四番地　家庭雜誌社

明治三十一年六月十五日發行

家庭雜誌第百七拾號

目錄



小川一眞製

海

家庭雜誌第百十七號
（明治三十一年六月十五日發兌）

社説

訪問及び音信の事

蘇峰生

用事を辨ずる爲めにのみ人を訪問するものかは、人と人との交りは、用事のみにて繋がる可きものにあらず。父子なり、夫婦なり、兄弟なり、姉妹なり、朋友なり。其の關係は必らずしも金錢の貸借あるにあらず。共同の仕事あるにあらず、共通の利害あるにあらず。彼等は一切利害損得の外に、人としての關係あるものなり。既に人としての關係あれば、人としての交際を全ふするヿも、亦た思はざる可らず。即ち用事以外に交際あり。されば用事なしとて、人を訪問せざるは、決して交際の誼を全ふする所以にあらず。時も場所も頓着せずして、徒らに屡ば訪問し、長談し、人を困殺するは、決して好みす可きにあらず。されど用事なしとて、鼬の道同樣、親しき人を疎遠にするは、亦た決して好みす可きにあらず。而して餘りに疎遠にすれば、遂ひに閾が高くなりて、之を踰ゆるヿすら甚だ六ヶ敷なるものぞかし。山間の小徑も、若し人の之を蹈まざれば、乍ち茅薄生ひ茂りて其痕を沒す。人と人との交際も此の如し、折角の親友も疎情になれば、何時しか其の交情は斷絕するものなり。故に人事の交際に於ては、訪問は最も大切なり。用事の有無は別として、互ひに訪ひもし訪はれもするヿは大切なるヿなり。

訪問と同時に大切なるは音信なり。兎角日本人は手紙は用事を辨ずるものゝみと心得、用事なければ、如何に親しき間柄にても、時としては親子の間柄にても音信をせぬものあり。此れは大なる心得違ひにして、決

して天倫を全ふする所以にあらず。訪問は近き場所のみに限らるれども、音信に到りては、星や月の世界にあらざる限りは、世界の隅から隅迄行き届くものなり。然るに斯る大切なることをば何を苦んで怠るぞ、甚だ心得難きことにあらずや。

概して西洋人は、能く手紙を書くものなり。而して其の手紙は、如何にも綿密精細にして、時としては理由もたわひもなきことをば、幾百行となく、幾頁となく、書き立るぞ殊勝なる。人或は西洋人を實利的人間とのみ云ふも、そは僅かに片面の觀察に過ぎざるなり。彼等は用事の手紙をば、用事を辨する爲めに、直截簡切に書くなり。併しながら用事以外の手紙をば、矢張り書くことの必要を知り、其の必要に應する爲めに勞を惜ます、否な彼等は之を勞と思はずして、却て交際を全ふするの樂みとなすなり。日本人は用事と交際との區別を知らず、されば用事の手紙を書くにも、前後無用の文句のみ多く、却て用事の主旨は、茫然として辨ず可らざるが如きものあり。而して交際上の手紙に到りては、書くの必要すら感せず。折角之を書きても如何にも極りきりたる文句にして、何の興趣もなければ、何の情味もなく。而して親子、夫婦、兄弟、姉妹、朋友千萬里の外にありて、朝夕相見るが如き感じを與ふるもの絶てなくして僅かにあるが如し。西洋にては手紙を書くことは、普通男女の嗜みとして必らず修練し居るものなり。されば其の人の位地如何によりて、上手と下手とはあれども、決して之を等閑になし居らざるなり。

昔て太閤の小田原陣中より淀君に與られたる書簡を見るに、如何にも英雄の情懷を察するに足るものあり。我國にても訪問と云ひ音信と云ひ、從來はそれ〳〵の式もあり、習ひもありたれども、概して維新前後に破壞せられたるなり。されば明治の今日に於て斯る風習

を養成するは、家庭及び社會改良の上に大切なるとと知る可し。

論説

十九世紀の一女丈夫

孤島生

萬國婦人矯風會々頭、フランシス、ウイラード女史去ぬる二月十八日を以つて不歸の客となる。三千里外の赤の他人に我等は何の關する所もなき譯なれど、女子と社會との關係を密にし、女權問題に就て少なからぬ功績ありし此の女丈夫豈又た就て學ぶ所なしとすべけんや。

ウイラードと云へば人は直ちに禁酒問題を想ひ起し、禁酒矯風事業以外に、又ウイラードなきが如く持て囃せども、我等の見る所を以つてすれば、女史の本領は決して斯くの如き小さき範圍に限られたるにあらず、寧ろ近時有數の政治家とこそ稱すべきなれ。不幸にして現時の社會は未だ女子が議院に論議するを許さず、廟堂に立つて畫策する處あるを許さゞるため、止むを得ず禁酒矯風の幕の内に隱れたれど、若し能ひしならば女史は實に某新聞記者の評しけん如く、米國著名の大統領となるべかりしなり。快刀亂麻を斷つの力を有して、政治上、社會上の趨勢、企畫、陰謀を熟知し、人を率ゆることに於ては、グラツトストーン氏を措ては、當時其の敵手たるべきものあらず其の成功に於ても敢て劣る所あらざりしが如し。宜なる哉其の統治の下にありし婦人矯風會が、既に米國社會上の一大勢力となり、引ひては世界各國亦將に其の風靡する所とならんとしつゝあるも。

ウイラードは千八百三十九年(天保一年)九月廿九日・紐育州ロチエスタアの近傍チヨルヴィルに生まる、生まれつき最もか弱くして、丸る二つになりしまでは歩

むことも叶はず、三つの時家内擧りでヲハヨに移り小さき娘は何か譯の解らぬことを歌ふが面白しとて、御客人の御愛憎にと、客間の椅子に乘せられし事などありき。四年ほど經ちて、家族は凡ての道具を荷車三臺に積み乘せ、まだ鐵道なども開けざる時なれば、三週間ほどかゝりてウイスコンシンと云へる所に至り、此處をば永住の場所とぞ定めける。

ウイスコンシンにて小さきウヰラードは七つより十九までの歳月を送り、自由氣隨に樂しき小供の生涯を送りたり。兄なる人にてヲリーパーと云へるもの、竹馬に乘る事を好みて、間がな隙がな乘り走りけるに、二人の妹も何時しか眞似て、兄に劣らぬ高脚を造り、乘るヲ驅けるヲ是が女子かと思はるゝ許り、兄が石彈きを始むれば妹も負けずに之をなし、兄が馬に乘れば妹も早速其の尻に乘りて、世間わらねば見えも外聞もなく、思ふ存分爲たき事のみして其の日を送りぬ。母なる人が孃も最早や大人となりたる事故、何時までも短かき衣物の下髮も宜かるまじとて、裾長き衣物を與へ、髮をも束ねて結ぶべく命ぜしに、ウイラードは餘程之が厭なりしと見え、日記の中に記して曰く、

『母上は妾が髮をコロップ抜きの如くに巻き上げ、十八本のピンを其の上に挿し給ひぬ。然れば朝より頭痛劇しく堪へがたきばかりに、物憂き事此れに過ぎたるはなし。加之、妾の足は妾の大嫌なる長き衣物にまつはられて、飛ぶ事も叶はねば走る事も能はず、明日よりは又夫の垣根を飛び越すこともなしがたかるべし』

斯くの如く自由に育ち、斯くの如く御轉婆＝若し御轉婆と云ふべくんば＝に育ちたるにより、其の心にも自然男子女子と云ふが如き區別を設けず、男子の遣りうる丈けの事は女子も亦之れを爲し得べしと信ぜしならん。

十九歳の時再びイリノイス州エバンストンに移住し、廿歳にして同地の西北女子大學を卒業し、廿一歳學校教師となりて教育に從事し、傍ら文學の修養を勉めしに、天性の才華愈々進みて名媛の譽一時に喧しく、殊に其の容貌秀麗にして、才氣は著しく交際の上に現はされたるにより、窃かに思ひをかけしも少なからざりしとか。

然れどウイラードは女子よりも寧ろ男子なり、否なその眼中には殆んど男子と女子の別あらざりしが如く、殊に上へ／＼と進む功名心は須臾だも其の躰軀をして茶の間臺所に安んぜしめず。三十五歳斷然教育界を辭して、禁酒矯風の事業に着手しき。夫より四年の後婦人禁酒協會の書記となり、明治十二年には、非常なる政治的の能力を以つて、全合衆國の禁酒會を合同せしめ、二十一年には終に世界禁酒會の會長となり、全速力を以つて縱橫無盡に世界の舞臺を驅け廻りしことと實に男子をして後に瞠着たらしめし程なりき。而して死に至るまで忠實に其の職を盡くし、社會に向つては只管婦人の地位を高めて男子と同等ならしめんとし、女子に向つては男尊女卑は決して男子の罪にあらず、女子自ら進んで働かざるが故なることを說明し、身先づ第一に衆に先んじて其の摸範を示したりき。彼は實に婦人界のグラッドストーンなり、變化多く、趣味多く、政畧に富み、機智に富み、變に居て動せず、治に居て淫れず、衆望を一身に集むる事、廣き世界の女子の内にて、今の英國女皇ビクトリヤを除きては、其の類なしと、評せられし程なりき。

女子なりとて、男子なりとて、元より入たる點に於ては變りあるべからざるに、男子の常に尊ばれて、女子の常に卑しまるゝは、心あるものゝ眞に慨嘆する所、我國に於ても亦之を論ずる人少なからねど、其の論ずるや只口先ばかりの事にして、自分自身進んで實地に

試みんとするものなきにより、徒らに世の物笑ひを買ふに過ぎず。論じつ、笑ひつ、論ぜられつ、笑はれつ、さて何時までたちなば與に女權の擴張を見るべきか、隨分心細き感なくんばあらざるなり。

苟しくも女權をして男權と均衡を保たしめんとするには、只須らく女子自身が、進んで社會にある働をなすべきなり。自分の地位まで男子の力によりて取りて貰はんとするが如き餘り貪むべき事にもあらず、寢て居て果報の來るものにあらず、ウイラードは死に至るまで働きたり、而してその働によりて夫の地位を得ぬ。今や集會政社法の改正案は下院を通過して、女子に政談を許さるゝ亦遠きにあらざらんとするに際し、内に顧みて我等は、海の彼方の女丈夫を思ふを禁ずる能はざる也

海　（口繪參照）

沖津白波眼もはるかなる海邊、聳えて立てる岩の上に、何を釣らむとすらむ、何を漁らむとすらむ、海人の坐れる。岸邊に立ちてこの海人の姿を見むとき、さながら骨敏孫の離れ小島に嘆てる如く、いとも浮世に寄邊無き寂しき感を起すべきか、魚釣る絲の心細くやあらむと思ふべきか。さてもまた世に秘め事を限り知らぬその底深く沈めたる海の魂に聲かけて、その秘事を聞かむとしつゝ、波に明けゆき波に暮れゆく水の上なる生活に、やがては額に波のうね〳〵疊ねゆきて老いむとすらむか。あらず〳〵、「天地吹きはらしの大座敷に笠の下の鬢の毛まで涼風に煽らせて懷中にも袂にも從何位何の守樣とぎしついて居る方に進ぜたいほどの好いものを持つて」(露伴の新浦嶋中の句)世の利欲にあくそくする人々を嘲けり笑ふて居るべきか。あはれ浮世を何の白波に心まかせて安けくも辛くも思はむはその人々の心々にてあるべし、夏は來れり、海の上にも。涼風波をわたりて塵も汚れもあらひ去らるゝ、海水浴の時節も近きぬ、遊ばむか、遊ぶべし、この海は東海道興津、清見潟なり。

信　玄

清見がたそらにも關のあるならば
月をとゞめて三保の松原

史談

思川

（烈女光子の事蹟）　四季阿彌

時は足利將軍義輝三好松永の手に弑せられて、御弟南都一乘院の覺慶僧上、長岡藤孝の孤忠に依つて髮を蓄へ、織田信長の力を賴みて京師に入り、名を義昭と改め、遂に十五代の將軍職に就かれたる永祿年中の事かとよ、三好長康の家臣に奈良義成といへる若侍ありけり、文武兩道はいふ迄も無く、おさ〱遊藝の道にも拙からず、師を撰びて學びつる内に、笛は勝れて好む處なりしかば、己が住める京は伏見の里より、西岡なる貞光久左衛門許通ひつゝ、心を込めてこれを學びける、久左衛門は笛をこそ堪能なれ、性質無下に卑しく、色好みの男なりければ、何時しか義成の妹光子に思を掛け、妻子もある身にて種々に心を碎き、義成の笛學ぶとて往來するを幸ひ、自らも度々其家を訪ひて、戯れの内にも夫となく思を仄めかせども、素より妻子もある久左衛門、左る心あるべしとも知らざりしかば、柳に風の待遇もどかしく、或夜人なき折を見て、久左衛門義成に向ひ、御身の妹子を賜へよとの難題、義成始めは取合はざりしも、重ねて幾度も繰返へす言の葉、嘘とも見えざりければ、痛く驚き呆れはてつれども、猶去氣なく打笑ひて、夫は何をか仰給ふ、御身には妻あり子あり、重ねて妻を持ち給ふにか、戯れも事にこそよれ、再び言出で給ふなと打消せば、久左衛門猿の如き圓なる眼を見張りて、戯とか戯には非ず、言はるゝ如くば、吾れに妻あり子あるが故に妹子を賜はらずや、と膝を進めぬ。義成も別に詞を出すべき途なければ、然なり若し御身に妻子も在さずば兎も角、夫れ在してはいかで…、久左衛門はいよ〱眞面目立ちて、

妻子だに無くば御妹子を賜るべかりしか。
此夜は義成は其儘に詞を他に轉じて、月にうかれ草葉の露を蹈みて、一管の秋を弄びつゝ家路には歸りけるも、久左衛門は只管に心迷ひ居たるものから、罪も咎もあらぬ、妻子をば其夜直に追出しぬ。

奈良義成の妹光子は、今年十八の姫盛、色雪を欺きて白く、顔花耻しふして麗しき事限りなし文讀み物書く道、茶、花、香などの嗜、音樂和歌何一つ勝れざるもなく、和歌は其内にも秀逸多かりければ、見る人心を通はし、思を焦さずといふ者なし。老ひたる母と兄義成に仕へて心も賢く氣もいとやさしかり、天晴れ容貌も心も揃ひたる美しの娘よと、評判の高ふ傳えられしは、これぞ災の源とは知られけり。

久左衛門は妻子を追ひて、鐵面皮も人を以ていよ〳〵義成の許へ婚儀を申入れたるより、義成は今更の如く打驚き、如何に返事せばよからんかと一人胸を苦しめける。去れど年も多く久左衛門とは違ひ、笛より外に藝もなき男を良人にせよとは言出るだに言出で難し、彼れ怒らば怒れ妹の大事には代ゆ可らずと、終に斷然之を否みて、光子をば野村越中左近高勝へぞ嫁入らせける。久左衛門は義成が素氣なき返事に添えて何よりも秘藏せし笛を打碎き、今より笛は一生吹き候はじ、師弟の契も此笛の如く覺召し給へなど言ひ遣しけるを聞き、尙吾心を懸けたる光子は、野村越中左近高勝に嫁入したりとの噂を耳にし、狂氣の如く打腹立ちて、罵り騒ぎつゝ、此上は義成一家を斷盡して、此怨を報ゆべしと、太刀を提げ驅出んとする事も度々なりしが、家人に遮られて一日二日と日を送れる折柄、將軍の御坐所なる本國寺を三好黨の急に起つて圍むと聞き、今は私の事にのみ屈托すべきにあらずと、急ぎ御陣に走せゆきて、將軍をば守護したりけるが、幸ひ義成は敵陣に在り、機もあらば討果して、武士の一分を立つべ

しと、思居たるぞ執念けれ。
三好勢は犇々と本國寺を圍みたりける折、日蓮宗の僧徒義昭を憫み、使を以て三好勢に言遣しけるは、本國寺はこれ忝に三好家の創設ありし所、今之を兵馬の蹄にかけ、靈地を汚し給ふと如何あらん、能く〱思案し給ふべし、今より五日を待ち給はゞ將軍を說き他所に移しまいらせん、其折を以て攻め給はゞ、靈地をも汚さずして、勝戰又心の儘なるべしと、長康之を聞きて實にもと思ひたれば、急には攻めもかゝらず、引き退きて遠卷にまき、將軍退去の日を待ちける程なく、兼て密使をば信長へ立てられ援兵の儀を請はれしがば、信長自ら將として大兵を率ゐ來り、一戰の下に三好勢をば蹴散らしける。去れば三好勢は此時に至りて、欺かれたるとは悔めども其詮なく、雪崩となつて落行きける内に、二騎轡を押並べて引返し、勝に乘つて追掛ける、潮の如き大兵を物ともせず、縱橫無盡に斬立薙立つる若武者あり、一人は越中左近高勝にして、他の一人は奈良義成なりけり。去れど衆寡の勢は如何ともするに由なく、二人共に傷を被りて、刀折れ弦絕へ、賴少なに見えたりけれども、更に退くべき樣子もなく、疲る〻馬を乘捨て〻尙ほ突進む目覺しさ、今日の戰の花なりと、敵も只管感歎しつ、唯寄らせじとするのみにて、吾れ討んといふ者なし、此時久左衛門は斯くと見て、好敵こそ見出したるよ、積る怨を思知らせんは今なりけり、と手兵を下知して兩人を圍み、難なく首をば討つたりける。

光子は母の許を訪ひ、互に良人の上子の上を思煩ふ程もなく、一人の郎黨走せ歸りて、越中左近高勝義成と共に馬をならべ、群がる敵に斬つて入り、遂に貞光久左衛門が手に討たれ給ひぬ、と注進する程もあらず、何處よりか亂れ入りけん、五十餘人の雜兵、猛く光子の手足を取り、引擔ぎて走去らんとす。母はやらじと

爭ひしも、老といひ女といひ、其甲斐更にあらざりける。

光子は雜兵の手に捕れて、何處にか伴はれ、如何なる憂目を見るやらん、今は有りとも甲斐なき身なり、良人も兄も世を去りて心殘るは母のみなれど、夫さいかゝる身となりては、死すべき時に死せんのみと、靜に心を決しつゝ、終に或家の一間に押籠られけれど、更に涙もあらざりけり。其夜の事なりける、此家の主人と覺しき武士の、ソト物の隙より居間を覗き見て去りたるのみ、二三の雜兵に守られて、憂目を仇に十日餘り過しつるに、或日居間の障子をひらきて、入り來れる主人といふを見るに、コハ如何に貞光久左衛門ならんとは、久左衛門は圓なる眼を細めて、言葉靜に年月焦れ渡りしこと、兄義成に請ひて妻となさんとし、妻をも子をも去りしと、思餘りて理不盡とは知りながら、雜兵をもて奪ひ來れると、さま〴〵に搔口說き、枉げて我心に隨ひてよと迫るを、光子は聞きて口惜しく腹立しくは思ひけれど、イヤ〳〵彼は良人の爲め、兄の爲にも當の敵なり、油斷を見せて讐を報ふには再び得難き機といふべし、暫く欺くも一つの方便、さなりさなりと肯きて。良人越中左近も兄と共に戰沒しぬ、今は賴むべき木蔭もあらぬ我身を、斯くまで覺し給ふとの噓ならずば、いかで御心に背き申すべき、千代萬代の末かけて必ず見棄て給ふなよなど巧にあやなすを聞きて、久左衛門いかで前後の思慮に及ぶべき、酒肴など持運ばせ、光子に酌をとらせて醉心地面白く、いざと手を取りて閨に入らんとす。光子は媚を含みて、耻らふ躰にもてなし、身は今良人無く兄もあらず、老ひたる母一人ありて、母もさぞな吾身の上を案じ給ふべし、今宵は一先づ母の許へ送歸し給へ。母も君が深き情をだに告げんに、如何で否みなどし給ふべき、明日にも母に許を得て、君が情に晴れて隨ひ申すべし、と

言出づるを、久左衛門聞きて、いや〳〵其儀ならば使にても事たるべし、御身を放ちやる事心元なしとて聞入るべき様子も無し。光子は秋波に久左衛門を見て、君の心の疑いと深くおはすとよ、去らば文もてかくと母を告げ申さんに、暫時待たせ給へとて、久左衛門を先づ寝間に入らしめ、硯引寄せて文さら〳〵と認め、人をもて之を母の許に送らせ、久左衛門が待ちつゝある寝間の内へと赴きける。久左衛門光子の入り来れるを見て、喜ぶ事限なく、摺寄りて戯れんとせるを、光子は俄に突倒して、傍なる久左衛門が佩刀をとり、鞘を拂つて唯一刺に胸元を刺貫けば、久左衛門は餘りの不意に脆くもアッと叫びて息絶えける。光子は猶久左衛門に刺止をさして、静に用意をとゝへ、刃を逆手にもて腹掻切り、天晴の最後をば遂げたりける。扨て又光子よりの文を頼まれし使は、伏見の里に至りて、其家を尋ね、光子の母に文を渡しける。母は封押切りて文を讀むに、光子は貞光久左衛門に奪はれたると、彼が戀慕を幸ひに、今宵彼を討果すべき覺悟の事、討損ずるとも討果すとも、身は早や此世に無きものと覺してよ、不孝の罪重ね〳〵後の世も恐しくなど書き連ね、文の終に一首の歌を添えたり、

思ひ川深き淵瀬ははやけれど
さそふ水には名を流さめや

母は之を見て靜に文を巻收めつ、使者に向ひて、暫し待たせ給へ返書認むべしとて、一間に入りしが、待てども〳〵出來らず。密に之を窺ひ見るに老婆は短刀もて咽喉を貫き、紅血に染つて死し居たるより、打驚きて引返せしと。

信長公後に至りて之を聞かせられ、貞光久左衛門が不義不仁、誠に憎むべしとて、其妻子を捕へ、磔刑にぞ行はれけるとか。

孝子五郎右衛門

幕府德行旌表の權輿

天聲

徳川幕府時代にて人民德行旌表の事ありしは五代將軍綱吉の時を權輿とす。常憲公（綱吉廟號）御實紀附錄に

「御承統の初め諸國巡檢使を立てられ、州郡の利病さも尋訪せられしに、駿州富士郡今泉村の農五郎右衛門と云へる者、父母に孝を盡し姉弟に睦ましく、その上年のみのり惡き時は、己が儲蓄を散して近鄕の者の飢餓を賑救する由彼使等歸り來りて聞え上しかば、御感なゝめならず云々、當家の代となりて孝子節婦力田篤行の者を旌表せらるゝ事は之をもて權輿とするにぞ。」

とあり、五郎右工門が行爲の詳細なるは傳はれること少なけれど、近鄕の父老が今に談柄にするは、その父と母との命の異なるに困じて下駄と草履とを交互に穿きたりといふ事なり。これは雨後の時にてやありけん、父は草履にて行けといひ、母は下駄にてといひけるを、五郎右衛門孰れの命にも背かざらんとて二つながら穿き出でしとなり一わたりは笑ふべきやうなることながらその行爲の如何に尋常に異なれるかを見るべし、今林大學頭春常のものせし傳記と當代の五郎右衛門に聞き得たるとによりて事蹟の概要を記すになむ。

吉清は駿河國富士郡今泉村の人、五郎右衛門は其通稱なり、今を距る二百五十五年前正保元甲申年に生る、父を太郎右衛門といひ母を鋭といふ、家代々農事をもて業とす性至孝にして情け篤く、柔順にして勤勉殊に超え、嘗て一度父母の意に悖りしことをきかず、父母病あれば枕邊を去らず、醫藥の効なきときは只管に神佛に祈請し、晝は終日の勞を厭はず、夜はよもすがら看護に瞼をまじへず、溺器の穢はしきより衣服の煩はしきに至るまで自づから是を濯ぎ清め、飲食の加減父母の好みに應じて是を調理し、人手をかりて勞を惜むのことを爲さず、心を盡し身を苦めてそが全快を祈るの傍ら、またおのれが職務を廢せしことなく多くの婢僕を使

役して手足の如くいそしみ勤めしめけると凡人の及ばざる處わりといふべし。

歳飢うれば倉庫をひらきて賑はし、貧き者には粟を與へ布を施し、遠近他郷の別ちなく力の及ぶ限りそが危急を救ひ公のわざに財寶を惜まず下を憫み上を敬ひしかば、一村の内はいふも更なり他郷他國に其名知られて人皆其行を德としけり。

其後父母二年を隔てゝ相亞ぎて死歿りしかば其悲嘆限りなく、喪に居て涙にくるゝと三十五日一日も其が常に語り、常に眠り、常に笑ひし室を去らず、或は讀經し、あるは念佛し、程近からぬ菩提寺なれど、日毎に清岸寺といへるに詣でゝ、其事ふると生ける人におけると異ならず常に其在世のとを追想しては憮然たるもの又しかりしとぞ。

時は靈元天皇の治世、將軍綱吉の延寶九年（此年十月九日天和と改元す。）四月八日、吉清卅八歳になりける夏、諸國巡見使渡邊久助、武藤莊兵衛、宮崎七郎右衛門等沼津領、比奈村に泊するの刻み、五郎右衛門の名をきゝて是を招ぎ、平常の行爲人に超絶え父母に對して至孝なるの點を質す。吉清かしこみて、そは何らかの誤りにてや候べき、僕に於ては毫も覺え候はずと答ふ、即ち翌九日吉清の家を訪うて里老をめし、五郎右衛門の答への眞僞如何を尋問ぬ、里老其尋常に絶せるを說いて、德行衆に超えたるむねを述ぶ。三氏是を筆記して此處を辭し、大宮町を經て北の方精進川村に至り遂に使命を了つて江戸に歸る、此行吉清、六里許の路程を精進川村まで追ひ隨ひ、此度の一條、御赦免のと偏へに願ひ奉るとて、只管に謙遜りて其名譽を辭せんとしぬ。封建の世、上を恐るゝの弊幾分が玆に至らしめしとはいへ、また以て其人爲の質朴なるを見るべし。

斯くて其歳も暮れぬ、あくれば天和二年の春二月、代官井出治左衛門正基台命を崇りて吉清を江戸にめす。

其折代官よりの調書の一節、吉清が身上の覺書は如斯くなりき。

覺

一、五郎右衛門親より讓請候田畑高五拾石餘自身農事に出精にて買求め候高共當時持高百六拾五石餘

　內、六拾五石
　　古郡又右衛門御代官所の内〔原田村 齋藤村〕分
　拾石餘
　　野村彦太夫御代官所ノ内　比奈村分
　九拾石
　　井出治左衛門御代官所ノ内　今泉村分
　　此内田高七拾八石六斗二升九合、
　　畑高拾壹石三斗七升壹合、
　　右の內四拾石餘手作殘り分散田ニ仕リ候

一　五人　下男
一　六人　下女
一　三疋　持牛馬

天和二年二月廿日調、　代官井出治左衛門

去程に吉清江戸町奉行所に召出され、扨其孝養の本末慈善の終始詳かに言上すべしと奉行して問はせらる。吉清恐れ入りて申上けるは、僕、十年の前父を喪ひ其より四年母を送りぬ、其生存の日に當つてや、孝養の申上可きなく、慈善の口にのぼすべきもの候はず、愚鈍の質罪萬死にあたるべし。父の心母の心に悖りしとかなはざりしとゝもこそ覺え候へ、其他には心當りもなく候とて只管に辭し申す。さらば其覺え居るといふなる過失のこと申上べし。其れ聽かんとあれば吉清畏みて、さん候、僕數ふれば二十年前、幾月にやはべりけん庚申の夜のとにて候、僕父と共にさるべき知己の許に招かれつゝ、夜更くる迄酒汲みかはしてありけるが父は尙興盡きで其が主人と語りあはせつゝ侍りしかど、僕は母のと心に懸れば、やがて先にと辭して歸り候ひぬ。歸り來て見るにはやく家の内は暗うなりつ、皆眠りたりと覺えしかばやをら門に入りてそが儘に戸を細目に開きつゝ父歸りなば入りやすからんを計りて、僕はおのが臥戸に眠り侍りき、さるを家の奴なりしもの僕が心を知らず、父も共に歸りしと心得、其が戸締りを固くし侍りぬ。程たちて父歸り來つ、戸を開

かんとするに開かねば、拳をあげて烈く叩きさふらひしかど、我れも人も皆寢はべりて應答さへするものなく。時しも冬の最中にて夜風凄く肌を刺し、身内も凍るばかりなれば、暫時こそありつれ堪へがたくて墻を破りつゝ、からくして家の内に入ることを得たりしが、其折父の怒りに觸れ候ひしことども想ひ候へば、僕の心得ずして父母の心に逆ひ候ひしこと尙多かるべくや、然らば何の孝か候べき、慈善のことも其れに準じて御賢察仰ぎ奉ると恐る〳〵答へ申しにける。

列座る人々是を聽いて、ひたすらに感じ入り、廿歲にあまる些少の過失、常人ならば忘るべきを、今におもふて悔むこと、其孝心の程も察せらるべしとあつて、同き歲の三月十二日、老中大久保加賀守忠朝、吉淸を評定所に召出され、其方こと、父母に對して孝心厚く、兄弟に對して友愛の情深く、其上村々の民飢渴にせまる折は、おのれの米粟を吝まず其れらに施行し、業務に出精して下ざまの者を憫むこと、將軍にも感じ思召されつるあまり、其方所持の田地の内今泉村にあつて九十石、永々子々孫々租稅を免じ作德たるべきものなりとの上意有がたく御うけ致すべしとのよなり。吉淸感淚に咽びて申上けるは、有がたき仰せ、五郎右衛門身にとり如何ばかりの幸福ぞと悦ばしくこそ候へ、さりながら、僕、自ら耕して自ら食ふに足り、男兒二人女兒二人、妻さへむかへ候ひて、召使ふ者も少なからず、冬さむからず夏あつからず、飢うることもなく渴することもなく其日々々を樂くやすく〳〵送りはべれば、斯る重き御惠みは神佛の御罰もそら惶しく、朝夕の一時に變化せしにも譬へつべく、却りて子孫に奢りの心をのこすに似て、おそれながら迷惑此上なく候、重き命せを背くには候はねども枉げて辭し奉るに候、仰ぎ冀くは素の如く貢獻の米不足なく奉りて故郷に歸り侍らんとぞ申しける。

雖然其月廿二日、老中戸田山城守忠昌して、御書御朱印を吉清に賜りけり、吉清辭する能はず、即ち是を頭に戴き殊恩の忝けなきをのべて退り出で、大老なりける古河の城主堀田筑前守正俊、老中忍の城主阿部豐後の守正武、側用人牧野備後守成貞の舘々に至りて、台命の有がたき旨を拜謝して、父母御座りせば如何に悦び如何に雀躍りしはべらんとて涙に暮れける、此人々も、其の心實かに飾りなき有樣を愛でられつ、軈て酒肴を出して饗應されけるとぞきこえし、こを見もし聞きもするもの、語りあひて賞め稱へ、其幸福榮譽を羨まぬ者なんなかりける、されば吉清、少しも傲りたかぶることをせず、以前にも勝さりて勞力に服し、子に臥し寅に起き自らさきんじて働きぬれば婢僕等もまたそれに倣ひて主の爲めに身命を惜まず、他田畑の凶作に嘆ちぬる歳といへども中村が田地を見よやとて其豐かなるを怪しみしとぞ傳へぬ。

其後元祿十二年（赤穗義士復讎の年をさる實に四年）霜を以て今泉村に卒す、歲五十六とぞきこえし。

吉清妻を義と呼ぶ父母在世の折むかふるところなり、同郡岩本村字瀧戸、町田氏の女、性柔順にして貞節なり、よく夫を助けて家事を整へ舅姑に對する生父生母に於けるが如く、夫の兄弟に對し姉妹に對し愛をもて遇し情をもて迎へ、一家ために和して風波あがらず譬へば春の海の漾々たるが如く歡聲屋を洩れて和氣堂に滿ち、一族一家團欒の樂み筆紙の盡すところにあらざりしとぞ。

或歲のことなりき、相撲の人某、五郎右衛門の名を傳聞き、一度會して其性狀をも見んものをと、遙々來りてそが家を訪ひぬ、折から五郎右衛門留守なりしかば暫し座敷に入りて待つ程に、軈て主人は鍬かたげ鎌腰にして歸り來りつ、いと甚う疲れぬとて母親に湯をとらせ、足洗はせ腰揉ませせする姿の如何にも無禮氣なる樣

にて、子たるの道には背けりとも見ゆれば、某には如何にとひた呆れに呆れけるが稍ありて對面しつ、さて、御身のこと我里までも聞えて其名雷の轟くが如し、世俗御身をもて禍をまぬかるゝの術となす、『蛇もいでんな蝮蛇も出んな、おれは駿河の五郎右衛門』と三度唱へて進む時は如何なる幽谷深山に彷徨ふとも決して害にあはずときゝぬ、左程までも名ある足下にして只今の擧動こそ怪しけれ、親人をして足腰を揉ませ如何に勞れたればとて、洗足の湯までとらせらるゝと一圓合點參らざる儀なり、此わけ聽かせ玉はれと眉打顰めて不審氣に尋ね問へば、五郎右衛門頭を撫でゝ、おのれさるべき孝もなくさるべき効蹟もなきに、遠國の方々にまで虚名を馳せ候ことまことに汗顔の至りなり、されど今見られし行爲には故こそ候へ、我母常に我身を愛むと他に超えて、今の如く畑より歸る來る毎に、足腰をも壓り揉み叩き吳るゝと一日の如く變らず、若しそを辭退などし侍る時は却りて氣色を損じ、怒り泣き、我身の心盡しを無にするかやとて怨み候へば、止むを得ず其命にまかせて、畏くは思へ共、辭退して母の憤りに觸るゝには勝りぬべしと、さては斯くの如き擧動にも及びつるにこそ候へとて眞實おもてにあらはれしかば、某も其他のことは語らず、好き學問しはべりぬとて退り歸りぬとぞ今に里老の言の葉に殘りぬ。母は子を愛し子は母を愛しぬ。かくてこそ孝の心もいづるなれ。斯くてこそ愛の心も浮ぶなれ、世の母たり子たるもの、五郎右衛門母子に鑑るところありて可なり。

父といひ、母といひ、子といひ、妻といひ、中村五郎右衛門が一家の如きは良民の模範として世に稀なりといふべし。人世至樂のこと一家の和合にしかめや、團欒して汲む澁茶一碗は、心々の志を抱きて啜るゝところの玉露一杯の味に孰れぞや、あゝ和合なる哉團欒なる哉。

五郎右衛門死てより今に二百歳、子孫綿々として今泉村に存す、當主また五郎衛門の名を襲ぐ、蓋し代々襲名通稱となりしなり。

五郎右衛門の如きは、啻父母に孝養を盡して鄕黨の稱賛ものとなりしのみならで、なほ社會に立ちての職分と義務とを疎にせざりしなり、その他國の人々にまで感化をあたへたるをもても人となりを推しはかるべし。依りて思ふ、人の父母たらむ人の、家庭敎育に於てもその子の家督人として孝道を盡し家事を整ふるを敎ゆるのみならず、よく〳〵社會の一人として盡すべき職分と義務とに疎ならざらむやう敎へむとなり、おのれのなすべき行爲を完くせむとはいふまでもなけれど、人に盡すべき事を一層心がけむとあらまほし、即ち家庭の善人たらむのみならで、社會の良民たり功勞者たらむとなり。五郎右衛門は家庭の孝子、社會の功勞者を兼ねたる人といふべし。

談叢

梅雨の話

烟溪生

五月雨といひ、梅雨といふ、もとこれ同じことなり、舊暦五月の頃に降る雨あるゆゑに五月雨といふ、又た梅の實の熟する頃なれば梅雨とはいふなり、シト〳〵降りの誠に鬱陶しき雨なれば「水まして釣瓶の繩も長たらしちときりあげよ五月雨の空」との狂歌をよめるものあり歌には、我妹子が蠶屋の篠屋の五月雨にいかでほすらん夏引の糸」(匡房)など其他詩、發句などにも種々澤山よむでもあり又之を題に取るなり、支那人が黴雨のことだといつて居るも誠に無理はない此の雨の降る間は衣裳が濕つぽくなつたり、わるくすると黴

が生へることがある、とはいふもの丶雨露の恩は太したもので春の雨は木の芽の發育を助け夏の雨は果實の成熟を助けるなど秋の雨といひ冬の雨とても一として贅物はなし、田植時分に雨がなかつたなら水に乏しく挿秧も出來ねば稻禾も養ふことが出來ぬ、とりもなほさず此の梅雨なるものは實に日本初め支那、印度の如き南亞細亞地方——米產地——に取りては此の上もなき恩澤のあるものなり、されば一概に濕氣がある黴が出來るからといつて此の恩は忘るゝことはならぬ、

五月雨の源因は夏の時分に吹く所の西南氣候風と寒冷なる西北風との衝突泥亂より起因るのです、之れから少々此の話をしませう、

今玆に沸騰つ所の鐵瓶の側へ玻璃の器なりを持つていつて蒸烟を觸れたなら忽ち露滴が出來る

之と同じ理屈で陸地の表面又は海の表面より斷へず（太陽の射熱又は地熱等の爲めに上騰つて居る）水蒸氣は空中に達し凝り固りて種々の雲となり充分水蒸氣を含む所のものが乾燥いた寒冷たい風に衝突りて雨滴となるので雨の降るのは多く此等の原因から出來るのです、

風といふも空氣中の溫度の不平均なのを平等の溫度にする爲めに空氣の運動を始むるので溫暖な空氣の上騰つて空虛となつた跡を寒冷たなのが來て埋合せをするので、北半球の夏の頃に南半球の方から風を送る譯なり、

扨前に云ふた氣候風は何ういふ風であるかといふに、冬季太陽が南半球に直射する時は亞細亞大陸は冷却して氣溫低下し空氣は乾燥いて高氣壓の中心となり風は此の方位より八方に吹くなり、我國にて冬は常に西北の風が吹くのは此の譯なり、而して太陽が段々北に進み北半球を直射する樣になると中央亞細亞邊に在る所の沙漠などにては其の熱を感ずること速かで空氣は忽

ち高温となりて上騰り低氣壓の中心と變り四近の空氣は此の部分に向いて吹いて來るので、冬期とは丸で反對です、それ故我國では夏は西南氣候風を受くるのです、

此の西南氣候風は印度洋を吹き渡つて來るので、赤道直下極熱い所の水蒸氣の發散多き海面を吹き其の水分を含み來る故陸地に近づくに從つて凝集を始め黑雲となつて電光を閃めかし雷鳴を轟かし雨を降らすに至るなり此の頃まで未だ冷風の殘つて居つたのか此の濕澤山な西南風と衝突りて雨を降らすので、之れが五月雨又は梅雨といはるゝものなり前にいふ如く此の西南氣候風は蒸發の激しき海上を通過し來る故多少鹽氣ありて物色を褪まし食物を腐敗し衣裳を潤し黴を生ぜしむることあり

それのみならず身體の調子悪るく心持何となく倦怠くなり働らかずして安逸に傾かしむ、されば印度安南、亞刺比亞の如き氣候風の最も流通する所では住民の氣風は自然怠惰遊佚の有樣となるものなり

然し前にもいふ如く日本始め南亞細亞の地方は此の氣候風の爲めに起る所の梅雨の恵に浴して稻は發育つものなり

それで入梅は平年では六月十一日閏年では六月十一日で出梅を七月一日又は二日とし其間の三週間が所謂梅雨の期節とせり大抵此の梅雨前後に降り續くことが多きより俗に梅雨三十日と云へり

翁媼談

アンデルセン作
加藤とよせ譯

私はあなたがたに、小供の時分聞たお話を一ツ致しませう、私は此話を思ひ出す毎に段々面白味を增すやうに感じます、それは誰でも人は年がよる程善くなるも

のだといふ事を敬へてゐるからなのです。
あなたがたは、田舎にお出なさつて、茅ぶき屋根で上には苔だの草などが自然に生へてゐる極く古びた百姓屋を御覧成つた事があるでせう、デンマークの人は大底鶴を大事なものにしてゐますから、屋根の端には必と鶴の巣があつて、壁は傾き、窓は低く、只其一ッ丈が開かれる様に出來て居ります、竈は大きな瘤かなんぞのやうに、壁の外に突き出て、年經た木は垣の上に廣つて、其枝の下、垣の傍には、小さな池があつて、其中に五六羽の家鴨が遊んでゐたり、また來る人毎に吠えつく犬などもをります、丁度此樣な百姓屋が道傍に一軒ありまして、そこに年とつた夫婦が住んでをりました、所有物とてはほんの僅かばかりのうちで、此夫婦の一番重寶がり、また總ての財産とも言ふべき物は、唯だ一つの馬でした、それは初めから道端なぞの草を食べて生きてゐる樣にされてゐたので、百姓の翁さんは此馬に乘つて町に行つたり、又近所の人たちは時々是を借りて、其駄賃にと夫婦の者に何か心づけをしてやつてゐました、時たつて夫婦は馬を賣るか、さもなくば何かもつと益にたつ物に換へるかしたらよかろうと考へましたが、此何かといふのは何でありましたろう。
「翁さんお前はよく知つてゐるだろうね、けふはそれ市日だからね、町まで乘つて行つて、馬を錢にしてしまうとも、好いものと換へるともしてお出な、お前のする事なら、わしは何でもいゝのだから、市に行つて來なさいよ」とこふ言つて媼さんは翁さんに襟巻をしてやりました、それは翁さんかするより媼さんの方がよく出來るからなので、媼さんは二重に大そふ上手に結ぶ事も出來ました、媼さんはまた翁さんの帽子を自分の手でぐる〳〵撫で、そして翁さんに接吻をしました、翁さんは、今に賣るか換へるかされる其馬に乘つて出

て行きました、太陽はひどく熱く照りつけ空には一點の雲も見えず、道は澤山の人々が皆市に出る最中で、家畜を曳いたり、乘つたり、歩いたり、埃だらけの中を行く、其中に一人の男が苦しさうに歩きながら、市にとて一匹の牝牛を曳いて來ましたが、其牝牛は珍らしく見事なもので「あれあ上等の乳を出す、それは確だ馬を牛に、これはいゝ交易に成るだらうと」翁は心に思つて「おい其處のお前さん牛つれた人え」と言ひかけました「ふ、馬は牛より高價いものだがおれはそんな事はかまはない、おれには牛の方が役に立つのだ、だからお前さんさへよければ、取易へようぢやないか」「よろしうがす」と男が答へましたから、交換は直に出來ました。これにて用事はしはてたから引き返して歸ればよいのに、見るだけにても市に出ようと思つたのでその牛をひきさも悠揚に大跨に歩いて行きましたが、間もなく羊をひいて行く人におひつきました、脊中に細い軟かな毛のある良い肥えた羊でした「おれあ、あいつが欲いんだ、おらとこの垣根のあたりに。あれに澤山位の草はあるし而して冬にでもなれば、一所に座敷に居いてやる事も出來る、牛より羊を持つてゐる方が便利がいゝだろうて、易へようかな」と翁は獨言しました。

羊つれた人は早速承知して交易は直ぐ出來ましたので翁さんはまた羊をひいて大道を歩きつゝけました、暫くたつてまた他の人に追ひつきましたが、此人は畑から通路に出で來たので、大きな鵞一羽小わきに抱へてゐる「何でまあ重そうな物をお前さんは持つてゐるんだね」と翁は言ひながら「羽根はよし脂もどつさりあるそうして絲に繋ぐか、うちの池の中に游がせるかしたら、立派なもんだろう、内の媼さんも鵞が一羽あつたらなあと、幾度言つたか知れないが、今が丁度いゝ機だ、どうか媼さんに持つて行つてやりたいものだと

替へて「とりかへないかへお前さんの豬の換りにおれの羊をやつて、それで此方が恩を着ようが」と言へば一方は少しの異論もなく交易は整ひ、翁はまた豬の持主となりました、やがて町近くに來た頃は大道の人集は段々増して來て、丸で人と家畜の壓し合のやうでしたから、家畜は垣に沿ふた小路を歩き、關門の處に來ては税吏の芋畑を通つたもので其處に丁度鷄が人集に逃げ込んで、足に絲を繫がれて、身輕げに歩き巡つてゐる、此鷄の尾の羽根は至つて短かく、兩方の目をパチクリさせて、こつこ〳〵と鳴いた時は眞に可愛らしく見えるその時に鷄の心持は如何であつたか申す事は出來ませんが、お人よしの翁さんは是を見て「まああれは、おれが今まで見た鷄の中で一番小さい、和尚さんどこのより小さいやうだ、あの鷄を欲いものだ、鷄は其邊に蹴ぼれてゐる少しの麥で大概生きて居る、此豬の換りにおれを貰へば甘い交換に成るだらう」とこう思ひました遂に「とりかへようじやがあせんか」と税吏に問ふた「とりかへる」と税吏はくりかへして「宜しい損くもあるまい」

さうしてかやうに交換をしたところで關門に居る税吏は豬を取り翁は鷄を持つて行きました、偖翁さんはこれで市までの途中に澤山の用事をして仕舞つて、熱くもあり疲れても來何か食べる物と、精を付けるのにお酒一杯欲しくなりましたから歩みを茶屋にとむけました、丁度入ろうとした時、豚牧が中から出て來て、二人は入口であひました、豚牧は袋を負つてゐた「お前さん其袋の中に何持つてゐるんだへ」と翁が聞くと「腐れた林檎で是は豚の食べものにするんです」と豚牧は答へました「それや、また大した勿躰ない話だ、媼さんに持つて行つてやりたいな、去年草原の林檎の木に、たつた一つ實つたのを、戸棚の中にすつかり萎びて腐つて仕舞ふまで置いて、是も財産だつて媼さんが云ひ

〳〵ゑたつけが、今これ位大した財産、袋一杯の林檎これをどうかして媼さんに見せてやりたいものだと」翁さんは言ひました「お前さんは袋一杯の換りに何をこつちによこすえ」と豚牧が問ふと「サア何をよこすつて、よし此鷄をやろう」かやうに翁さんは鷄をやつて仕舞つて林檎を貰ひ、茶屋の座敷まで持つて行つて、氣を付けて、ストーヴ傍によせかけて、それからテーブルに就きました、伯樂だの、牛曳だの、其外二人の英國人だの澤山のお客樣が居りましたが、英國人は其衣嚢がふくれ出て、今にも張り裂け相に見える程の金持でした、が袋に目をつけて、「ストーヴの傍にあるのは何だろう」と問ふに翁さんはなに林檎が燒けかゝつてゐるんです」「それはまた何したのか」「どうして貴君樣方が知り成さろう」と翁は答へました、それから翁さんは、馬が牛に換へられ、また其他に換へられ、遂に萎び林檎になり果てたお話を殘らず致すと「そうか、それでお前の内の媼さんはお前が歸つたらいゝ顔するだろうか、何か騒動が起りやせんかな」と一人の英國人が申しました「何おれにどうするつて、あれはわしに接吻して、翁さんのする事は、何でも間違ないつて云ひまさあ」「そんなら賭をゑようか、どうだ我輩等は必つとお前に金貨一トンを賭けるわ」「一斗で澤山だ此方は只一斗の林檎しか賭けられないが、わし自分の身と内の媼さんを此賭になげこまふ、そうすれあ目方がおつゝくだろう」「うむそれで出來たー」とかやうに賭はまとまりました。

地主樣の馬車が戶の口まで來ましたから、二人の英人と翁さんが乘り込むや否や、程なく其小屋に着きました、「媼さん今歸つたよ」「早かつたね翁さん」「とりかへこをしたよ」「ア、そうかへそれはよかつた」と言ひもきらず媼さんは翁さんに抱きつき、お客樣などに注意もせず、袋にも氣が付きませんでした、「おれはのう、

馬を牝牛に換へたよ」「それは有難いそんなら是からは、乳だの、バタだの、乾酪だのでテーブルが一ぱいになるだろうよ、それは何よりだ」「だが媼さん、牛を羊に換へたんだ」「ア、それはなほのことい丶、お前はまあ何でもよく氣が付く事、内には羊一匹に丁度い丶かげんの牧場があるからね、羊は羊で乳も出るし毛ではチヨッキでも、靴下でも、こしらへられる、牛ではそんなものは出來やしない、毛なんぞ落ちるばつかりで、お前はまあなんて能く氣かきいたんだろう」と媼さんは喜びました「だがね媼さん、其羊を鵞に換へて仕舞つたのさ」「そんなら此年は焼鵞を食べられる、可愛い翁さんだよ、お前は何時でも、何かわしを喜ばせようと思つてゐるんだね、それは結構、足に紐をつけて其邊を歩かして置く事も出來るし、そうすれば焼くまでにはもつと肥とるだろうし」「だがね、媼さん鵞を鷄の換りにやつて志まつたんだよ」「鷄そうかへそれはい丶物と換へたね、鷄なら玉子を生んで、それを孵へらせる、そうすればあ、雛子が澤山出來る、直にまた畜鳥場も出來ようし、オ丶是はわしが丁度欲いと思つてゐた物だつた」と答へました「そうだよ媼さん、だがね、其鷄を萎び林檎一袋に換へたんだ」「何に、まあどうしたんだろうほんとうにうれしい、わしは夫ではお前に接吻しなければならないんだよ、まあ聞いてお呉れよ、お前は知つてゐるかね、今朝丁度お前が出て行つた後でわしはお前に、今夜お夕飯に何かお甘い物と思つて考へ始めたが、あげた玉子と鹽豚と、お甘しいお菜と、思ひ付いたんだよ、ところが、玉子と豚は有つたがお菜がなかつたから、わしはあの校長さんのお内に行つたのさ、彼處には澤山ある事を知つてゐたからね、だが彼の奧様はひどく吝くつてね、あんなに可愛らしく笑ふくせに、わしがお菜一つかみ貸して下さいつて賴んだらね、「貸せつて私は貸す物なんぞ何にも持ちませ

ん、内の邸には何も生へてゐやしませんもの、林檎一つでも、私は菱林檎一つでも貸してなんぞ上げる事は出來ませんなんて、はねつけたんだよ、今度は、わしがあの人に其菱林檎を十でも袋一杯でも貸してやられる、それが眞に嬉しくつて、考へても可笑しくなる」とかう言つて媼さんは心からの接吻を翁さんにしました。

「出來した！天晴れ！余輩はこんな人達が好きだ年もかう下り坂になつてゐながら夫婦がかく何時でも機嫌よきを見るのは確かに金の價直だけある、」と申して因で二人の紳士は、一升の黄金を、何をしても叱かられる事がなく、只キスをされた此百姓に拂つたと云ふ事であります。

そうです誠に人の妻たる者は、其夫が何事も一番よく知つてゐ、また夫のする事は何でも間違ないといふ事を悟る時に、何時でも得のいくものです。

是が私の小供の時に聞たお話なので、そうして今またあなたがたもお聞きなさつたんです、翁さんのした事は何でも間違は無かた、といふ事が、おわかりになつたでありませう。

（をはり）

新媳の述懐

乾坤

衣食住、なべて世は贅澤になりぬ、威權ある人、財産ある人の身に相應の奢侈は欠くべからず、されど、徒に美食を貪ぼり、美服身のまはりに競ひあふて時も場合も人の身の上をも斟酌せざるはうたてき限りなれ。ちりめんの羽織が錢湯行きの着物となり、下婢すら黄金の指環をはむるやうなりしとは新橋、からす森邊聲色うる女のすめる場所柄に限りたる風俗と聞きつるに今は無意氣と蔑まれたる山の手すらも、泥堂は共同の化粧場となりて紅脂白粉の箱、丁子石鹼に贅をつくして

娘も細君もみな色つくりぬ。三並雪子とて去る官吏の娘なり、去年十七にして去る女學校を卒業し、家政、裁縫、造花、割烹、女子一と通りの課程をあげて和文にも熟し、琴、月琴をもよくしぬ。殊更庭のをしへの正しければ、よろづ靜淑にして、數ある女の中にも一しほ立まさりて見えぬ、軈がて良緣もありぬべしといふ程に、學校の幹事なにがしといふが交際廣き人にて雪子をさる大學出の若人にすゝめぬ。此の人工學士にして、土一升金一升とも言ふべき土地に根生の素封家生蠟問屋の二男なり。いまだ部屋住なれど世は兄の物にてやがては財產分けて新らしく別家すべき境界なり、何は扨て置き嫁となるべき人々の親のおもはくにては、明らさまに言ふべき限りにあらねど、善惡に拘らず氣褄の取にくしと言ひ傳へたる姑のなきだけが、行末は知らず當座の居心あしかるまじとて、これに氣乘りして其處へ嫁がしむる事とはなりぬ。

去る程に衣裳髮飾ざり、化粧具簞笥、萬端、母親の手の及ぶかぎりを竭くして遣はしける、是を聞くむかしは嫁入をよろこびの中の悲慘にたとへ、何程勝氣の女とても、親の家を踏み出す時は必らず一滴の涙しぼらぬはなかりしと、されど、今時は萬事手輕になれり大方のものは婚禮の席に臨むを物見遊山と一つに見做して心いさみて行くが多かり。雪子もまた、こゝろ勇みて行きぬ、されどおもひ掛なき事こそ見たれ、三日目に彼の女は里がへりしてあらためて其の母親に會ひける時。悄然として氣の冴えぬ面色なりしは如何にしけるにやと、おぼつかなく母親に問はれて、左右なく答へも成り兼ぬるを、叔母なる人のこゝろづきて傍らより密かにうら問ひければ、扨てもうたてや彼の席にて明らさまに耻かきぬるといふ、那は又如何にしてか耻かきぬると重ねて問ひければ。雪子怫然として言ひけらく。叔母さまの前なれど凡そ婚禮は一生の大事、女たるも

の、晴れの場所とは言はずと知れし其の席には婿がねの外には男にして男にあるまじく、嫁の外には女として女あるまじく、世には千萬立ち勝りたる美男、美女のあるべきも、婚禮の席には是れを許さず、婿の外には美男なく、嫁の外には美人なくして一座の衆人の眼は唯この二つの身のほとりに注まりて、千百人に注視せられてこそ、羞かしくもあれ、嬉しくもあれ、又其の涯分もあれ、名譽ともおもひ、斯くありてこそ一生一度の晴れの場所ともいふべけれ。さるを我が婚禮の席、一生の記臆にのこるべき此の涯分名譽をを打碎かれしぞ口惜しけれ。开は何故ぞといふ親類縁者の人々の華々しく衣裝着飾りて臨まれしは、强ち妾に對する侮蔑の心とにはあるまじきも、世には引立役とて、嫁となるべき人の側らには態々醜婦を伴ひ來りて座にはんべらするは媒妁人の注意ひぞかし。相伴役に出づる女、客となりて出づる女の、いづれ美き衣着飾ざらぬはなきも、必らず嫁より一歩劣りたる身づくろいして出でしは席に對する遠慮といふものなり、今時の風俗は移り流行に新らしき好みを逐ふておのが着るよりはまづ人に見せ度きが先にたちて劇場、見物場、園遊會、婚禮の席、如何なる所も嫌ふ事なく場所のあらば機會のあらば我が衣裳と髮の飾りを示し衒はん心ぞうたてき。斯くて其の晩裝ひこらして席に出でたる人々には第一は家兄の嫁なりき、この人は藝妓にも見擬ふべき容貌なりしかば立居といひ、口の利やうといひ素人には受取がたき身のこなしにて、紋縮緬の三枚重ね、絲錦の帶、後しろ指は黃金脚の五分玉、本瑇瑁の櫛、双の無名指に寶石入りの指環二つづゝ穿めたるが、一座の衆目この人に集りて、われを見返へる人もなかりき。次なるは夫の從妹、この人はさる銀行家の愛女と聞きけるが、純色錦襴の帶に同じく寶石入り黃金の唐獅子の鉸付きたる帶留を爲し、珊瑚の大玉の根掛、

金剛石を星と輝やかしたる小形の金時計を持ちて、我が身に着くると言はんよりは寧ろ他人に示して誇りの料になすべく而地なりしがわれはこの炫服者の傍りにありていとゞ寠しくおもはれたるべし、その次なるは兄嫁の妹にて、これも又去る會社員の令夫人、年齡は早二十四五とも見ゆべきに總躰若づくりにて柄は十七八の派手なる裝ひ、地は茶がゝりたる錦に寶づくしの帶、半襟の粋なる好み、紫水晶に斑の入りたる根掛、下駄の裏ら金に白銀の金具打たせたりとは定めて斯る人なるべし、是等を第一流の衣裝好として以下七八人の女揃ろひ、彼方を見ても此方を見ても皆眼うつりのするばかり、顧りみて此の夜の正客、肝腎かなめの新娵は何處如何なる裝ひにてありけるよと心ある衆の人に顏見らるさいも無碍に恥かしかりきは妾が身の風俗なりき。段をつけて言はゞまづ第三流にも位し難く、大方は左右の美服に光りを奪はれて見る影もなかりしなるべく兄嫁の侍婢として使はるゝ、お金といへるはした女さへも猶われよりは立勝りて見えけるこそ口惜しけれ。これが常日頃の應對ならば、如何に麁服を着たりとて寸分侮を取るべき筈もなく、時には我慢に通す法もあれ、一生に一度の晴れの席にてこの如く衆の人の見る前にて、まざ〳〵しくあたりの人に光り奪はるゝやうの仕方に遭ふては如何にしても堪へがたかりと述懐して語りぬ。

這は一人の雪子に限らざりけり、今の世に娵入りたる多くの人の心には多少のおぼえあるべし、これ強ちなる業に競ふて、折角にこゝろせる淑女の一生を辱しめたるものとや言ふべし。奢りも場所を見てすべき事にこそ。

鷄日記

あけぼの

鷄どもは明治某年十月の暖かき小春天に、富士の裾野の里に生れ、只今某年五月にて、八ヶ月を經、鷄社會の血氣の壯者となりたり。

われ等の種鷄は何處如何なるものにてありしや、聞くにわれ等は主人が遙々東都の四谷より筐に襲藏て汽車に乘りて持來られたる卵なりとぞ、それをまへかたより家に飼ひおかれし地雞のカシハと云へる雌鷄に擁かせ、日滿ちて我等は世に出でたるなり。我等世に出で、三十日程經し時、母と仰ぎしカシハは主人に伴れられ、我等を捨てたり。一日二日は寂しくて堪えかねければ、同胞諸共に高く叫び彼方此方を搜し尋ねたれど母雞は影も形も見えず、聲さへ聞えず、我等はさゝやかなる横二尺縱四尺ばかりなる、屋根に明窓のつきたる小屋に入れられたり、叫ぶほどに、主人の粟、生麥或は蟲なんど持ち來て給ふに、何の事も忘れて啄へば腹滿ちて良久かさなりあひて臥す、腹やゝさみしく物ほしくなればまた〳〵叫びて母を呼ぶに、主人また出で來られて餌與へらる、かくして日暮るゝ際、前夜までは母雞の暖かき温き羽毛の腹夜具に包まれたるを、今は如何にして夜をすごさんとうろつくに、小屋の小暗き方にいと暖かげなる白き毛裘垂れたり、同胞の一箇が恐る〳〵潜りゆきていとよき寢所なりと嘻ぶ、諸共に潜りつ、押しあひもたれあひて臥すに、是はいつしか、主人の作りたまひけるなり、毛裘は緬羊の毛皮を綴りあはせて低く吊天井となしたるなり、板敷の上には柔かく細かなる灰と沙とを厚く敷きたり、暖かく心地よきこといふべからず、我等は嬉しく、共に嘻々相さゝやき眠りたり。

是より日を經るに從ひ、我等は主人を唯一賴みて、母雞は要なくなりぬ、晝は小屋より出でてあろきて梢の陰、

敷石の趣なる竹格子環らしたる園に遊び夜は此凹くき寝所に臥し、漸く大きくなりて雌雄は花冠美しく鞍羽麗しく生え、雌もまた自ら身形つくりて、一箇の鶏社會のものとなれることと、主人の庇陰と喜びあふ。同胞は雄四羽、雌七羽、合せて十一なり。各はや生ずべき羽毛調ひたるほどに、主人は各に名を命じたり。灰色したる羽に斑紋の細かに點じたるブラマ種の雌を其態度のいとおかしきとてポップ助と呼び、冠の單瓣の花の如く躰羽白く頸羽鞍羽の金銀絲拖きたる如き交趾種の雄の毛脚絹を被せたるを毛太郎と名け、黄羽身に滿ち黒の斑點鮮やかに肥えふくだみ腹のあたり圓らかに脂つき脚短かに重くろしく歩むほどなる交趾種の雌をタブ々々と稱し、同じ羽色して稍小さきをば、カヽと名け、鶴の如く白く頭より頸にかけて黒線一條拖きたる西班牙種の雌を一文字と謂ひ、全身黒く頸に黄羽混じたる交趾の雌を其聲笛の如しとて笛子と稱し、薔薇冠なる西班牙種の雄をパイン、茶色したる斑點ある兩個のポーランド種をハンス、クウスと名けたり、他に軍鶏種なる黒赤交へたる雄をアニモーといひ、此日記ものするわれをば、其冠の大きなりとて大冠々々と呼びならはせらる。

抑も我等の主人といふは、年齢十五六の少年にて、我等が飼ひ置かるゝ家は、主人の兄君、母上、祖母君、他に姉上もありと思はるゝ家族なり、僕一人婢一人、いとも靜けき世の生活と覺えたり。

我等の生立たる樣は畧記したるが如くなれば、是よりは、我等が鶏社會となりて、此山里の靜けき家に、如何なる樣にて其日暮らしゆくかを日記によりて知りたまはれ。但要なきことは省きて、外見にかうと思はんほどの事のみ記しぬき申すべし。

某年五月十日晴、餌麥麩に生麥折々混じたるもの、產

卵數五箇、新綠陰清くして我等心地いとよし、食後は躑躅の下に打群れて横はる、主人來りタブ々々を捕ふ、何事ならんと驚きあはて起く、タブ々々は主人に抱かれて圓やかなる軀は撫でられつゝ、いと迷惑顔したるを主人は見て微笑む、かれは肥えて持ち心よくおかしき容したりとて、われ等のうちにて尤も主人愛せらる、やう見ゆ、されどタブはあまり主人に抱かるを好まず、抱かれんとするときは、重くろしき軀を及ぶかぎりは疾く走りて逃れんとするを、主人は意地に興がられて植込の邊に捉ふなり、タブは困りし樣に鳴く、其時我はあはて走りゆき見れば何事はなくて主人の彼を抱くなり、我等は元來小さき屋に生立ちしなれば、他の鷄社會の如く、途方もなく遊びあるきまたは隣の茶園に侵し入りて追はるゝなどの不法はせざれど、さりとて園にのみ閉ぢこめられあるは好ましからず、もとより自由をもて喜べば、主人が愛さるゝにもせよ、あまり時々抱かれ、捉へられ、弄ばるゝは嫌に覺ゆる、主人の兄君はなか〳〵の惡戯したまふなりポプ助は滑稽なりとて、炭俵の蓋にせる束藁を細もて軀に縛りければポップは困難して飛びまはる、我等は不意の異形に驚きて一齊に逃げ出す、それを主人の兄君は笑ひて看たまひたり、折柄母君の來あはせたまひければ、止めたまへ惡戯を鷄どもは喜ばじとの命に兄君も細をときてポプは我傍に來れり。

黄昏近く空にサッと音して飛ぶ鳥あり彼の鷹ならむとて我は一聲警戒の音を發したれば、程なくいと奇なる聲を聞きぬ。折から主人は兄君と共に室の障子を開きて空をながめ、杜鵑が鳴いたといはれき、如何なる鳥なりけん、しかとは見えざりき、此日は食餌の外に菜の類多く貪ぼりて腹滿ちける。黄昏に及べば我等は主人が作りたまひし小屋に行きて眠れり。

五月十七日雨。餌麥麩、甘藷屑等、産卵數六個。

三

昨夜より風雨甍を叩き、今朝止まず、主人我等を外に出さず、宿木に留まりしまゝにて無聊に堪へず。ポブ一文字、ハンス、クウスなど疎き竹格子より出でんとし、さびしかりて鳴き噪ぐ、主人來りて叱す、汝等靜にせよ、此雨に濕れて羽蟲生ぜば汝等苦まん、今に晴れたらば運動すべきぞといはる、我等は羽蟲の甚だしく我等を苦しますを知れど、雨天に濕れたるとき羽蟲の生ずるを思はず、糞泥に塗れてわらんよりは濕るるとも廣やかに動かんをば喜ぶに失望々々。

鼬鼠の大きやかなるが、する〳〵と出できて格子に立寄りて覗ふ、驚き警めたる聲に主人出で來られて竹竿もて追はる、かれ甚だ我等にとりて恐ろしき奴なり。晝は兎まれ夜ひそかに忍び來ることそ危うけれと同胞にかたる。

五月廿日晴、餌、麥麩、米、粟、産卵數四個。

此日新に我族に入りたるもの五個あり、軍鷄種にて黒き雄テムといひ、地雞の雌ポイカンといひ、雄をコム助といひ、ピーナ、モンチャーの二の地雞の雌なり。コム助は雄なる故初がほど我と爭ひたれど我には及ばず服したり、パインと毛太郎とアニモーは戰ひて後敗れたりければ則ちコムは第二番の頭目となりけり、我ら同族殖えたれば、此日より主人北の背戸の方に廣やかなる運動場を修めらるやうなり、背戸には麥畑、豌豆、菜などつくりあるゆへに、荒らすべしとて我らを至らしめず、此日ハンスは囮を出でゝ背戸に至り、豆菜を食ひしかば、主人にいましめられしが、ゆるされて來り、いふやうは、此度の運動場は廣くしてきはめてよし、早々移りたしと皆どよめきぬ。　（未完）

家庭

眼に見えぬ經濟

直野生

入るを計て出づるを防ぐは一家の大藏大臣たる主婦の重き任務なり、豫算超過の聲を聞く月は必らず不時の出費あり、また眼に見えざるの出費あるものなり。衣服を調へ道具を製したるなどのとは殊更に眼にたちて見ゆるともその品物の現に箪笥なり臺所なりに存するを知るが故に、左程冗費ともおもはれざるべきに、人々は先づこれ等のものゝみに眼を注ぎて、その當時はいと惜しきことに思ふが普通一般の例なり。

買物帳を何遍繙して見ても白米、薪炭、味噌、醬油等なくてならぬものゝみにて、格別茶菓子の代が多くもなし、結髪代が多くもなし、さりとて芝居寄席にも出掛けた覺えもなし、然るに衣服道具の代を差引て尚ほ通計若干錢の超過を見るは不思議にあらずや、一晩や二晩の泊客は毎月のことにて別に五日十日の食客もなかりし筈、白米、味噌、醬油の價段も總躰に前月と大差なき筈なれば、こは正しく日用必需品を多量に消費したるものといふより外あるべからず、左ればとて味噌汁を餘計に造りたるが爲めに味噌を多量に要したるは猶ほ經濟の本旨に適ひたるものなればこれが冗費になりしにてもあらず、さらば何故斯くは出費の多かるべきぞ疑はしき限と思はるゝとあるは實に眼に見えざる出費といふもののあるに依れり。

こは眼に見えざるが故に人多く注意を怠るは是非もなし、同じ二升の飯を炊くに薪の消費高の加減を爲し、飯を炊きたる後にて汁を煮、汁の後にて湯を沸かすなどは薪の經濟なり。長火鉢の鐵瓶に湯を絶たざるは可、然れどもその長火鉢に掩蓋(助炭)をするは炭の經濟

なり。（掩蓋（助炭）は指物師に賴めば安價て出來るものなり、それには是非抽斗をもつくるよ）。飯は米を少なく炊けば不味くして量增高ぬものなり、さればとて多く炊きて殘りたるを他家の猫に御馳走し乞食に與ふるなどは餘計のよなり。釜の洗ひ汁、飯櫃の洗ひ汁を流元に棄る人などあるは心得ぬことなり、これ等はある器物に溜め置き洗濯糊を煮るときの用に供するとも、また庭の植物の肥料とするも可なるにあらずや。米を磨ぎたるときの白汁は洗濯水として能く穢垢を去るものなり。

一坪の庭あらば必らず家鷄を飼ふことを忘るべからず、家鷄を飼はんとせば先づ牝鷄一羽を買ひ求め、これに卵子を抱かしめ、その孵化を待て追々に成長を樂むの利益にして快樂多きに如かず。大根の葉先漬菜の黃葉にても彼等は喜んで育つなり。魚類の骨つきを煮て雜穀に混じ與ふるは最も好し（養鷄は別に說くべし）



撫子にやろは化粧のあまり水

蓮根を煮るにその節の硬きところを取り置き日陰にて干し乾し、澤山蓄へたる上にてこれを碓にかけ粉末となし、砂糖を加えて麥こ菓子の如くに食すれば、肺病の人にもよくいづれ根の藥になるといふことなり。又た田舎などにては右蓮根の粉末を米の粉と捏ね交ぜて團子を製ることもあり。飼鳥に時々青葉を與ふるが如く人間もまた折々青菜を食すべきものなり。浸物に味好きものなれども醬油の多く入るものにて「節儉家に青菜を見せるな」といふ俚語もある

如く、青菜は一度湯でれば少量となるものなれば、餘り屢々すれば却て眼に立たざる不經濟を來すものなり。茄子の蔕を陰干にして貯へ置き、煮豆の加藥として好し。煎茶は小買するよりも晩春茶の芽立ちたる頃、茶園に就きて樹にて幾干と約定せる上、一家の子女を伴ふて遊び旁々茶摘みをなし、家に歸りて焙爐にかけ主婦自らの手製にならばいかに愉快に且つ風味よき品を獲るならん、猶ほ充分餘計に製し置きてこは愚妻手製の新茶なり幸に賞玩を賜へなど親戚知友の贈物としてもよきにあらずや。茶は來客の有無に係はらす毎日必らず要用のものなれば小買して一年に積れば莫大なる費なり、茶碗など陶器物の毀れたるを直に掃溜に打棄つるは惡し、燒續師の手にかくるもよけれども可成手製の方よからんか、繼ぎ法は珪土五分、唐土一匁、ヒノチカ土五匁（或は豐後土を用ゆ）を卵子の白味にてよく練りとろ／＼火にて燒くなり。襤褸屑を滅多に紙屑籠に投げ入るゝべからず、貯へ置きて下女の夜仕事として繩に綯らすべし、荷作りなどの時には意外の用をなすものなり。

まだ／＼細かき眼に見えぬ經濟の、そこら眼の前に澤山あれども、そは又た追々眼に入り次第に言ふ所あるべし。

雨の日くらし

まさと

子を愛する事

わが子をひたふるに可愛がりて、教育するとを知らぬは、憫笑限なし、牛の犢を舐め殺すに譬へたるもさるとなり、樂翁公の花月草紙に、かゝる人のありさまをあざけり戒めたる文に、「何にかへじ（何にもかへられず可愛し）と思ふみどり子の這ひまはるを見て、げにこの子は行末ざえ（才藝）も秀でぬべし、乳房見すれば、

ひたすらにはひゆくめり、心にさからふとあれば、有りあふものもて人を打つ、わがこの頭の疵を見給へ、この子の烟管もてうちしあとなり、親とても心に違へば、かくするぞ心のすなほ（眞正直といふ意）にはある、年のほどより力もありて、この疵を出でかしにけりと、癡おしなでゝほめぬるを、愚なるものも嗤笑ひにけり、笑ふ人よりは賢き人なるが、」と、烟管もて親を打つほどまでに我まゝを募らせ、そを素直なりとほむると、如何に敎へ無き子の行末ぞ思ひ知らるべし、我まゝも事によりては可けれど、概ねは依賴心の根芽を作りて、あらぬ方に成長しむるものなり、樂翁公の筆に笑はるゝ人は今の世には少かるべけれど、われ人共に家庭敎育に心がけむにはよき戒の言なりかし。



蓮の香や水をはなるゝ莖二寸

子守唄

子守唄は何れを問はず各地方概ね相似たるものなるが小兒談お伽話の深き意義無きところに趣ありて佳しとするが如く、子守唄もまた無邪氣く調おかしきを第一とすべきやうなり。なまなかに理をいひ道を敎示す意をこめたりともさせる益は無からむやう覺ゆ。

れたかれなんだか、枕にさへば、枕ものいふ、た、れたさいふたく。（京都）

の如きはまこと安らかに小兒を眠らせおちつかすべき調と意あり、

れんれころいちれろ子は可愛い、寢たら子も樂守も樂よいようお。阿母に抱かして乳呑まそ。
（伊賀古山地方）

れんれした子に赤い衣服着せて、

の如き平和に無邪氣なり。

犬ワン猫ニヤアチウ、金魚に鯰の子牛モウ〳〵、狗犬に鈴ゴロリン蛙が三つで三ヒヨコ〳〵、鳩ぽつぽにたて石々燈籠、小僧がこけてゐろ、かいつくかいつく布袋のさぶにつんぼ惠比須、雁が三羽で鳥居におかめにひうごんちやん、天神西行子守に相撲取、ごつこいわい〳〵てんわう五十塔、お馬が三疋ひん〳〵。（東京）

の如き目前の生物の名、或は物の數を自然に知り得むやうに口調おもしろし、小兒はこれを聞かばおのづから心地やすらかにきゝほるゝ効はあるべく思はる。子守唄につきて家庭に大切なる注意は子守の人撰なり、子守の役目は母親と乳母とにつぎて家庭教育の大切なる一なるとは今さらならねど、

れんれ〳〵されろ子は可愛い、起きて啼く子は面惡い、」
お主にしかられ子にせめられて、何處で立つやらわしが身は、
こんななく子のえう守せんに、お暇お吳よ私や踊ろ、よいよれんれ。

の如き唄を見ば子守といふ役目が如何に深く小兒の成長敎育にかゝはりて善きにも惡しきにも影響るかを思はるべし、子守をおかば子の母たらむ人これを他人とおもふべからず、わが子とひとしなみの心もてあつかはゞやがてわが子の上に良き結果あらはるべし。

養生法

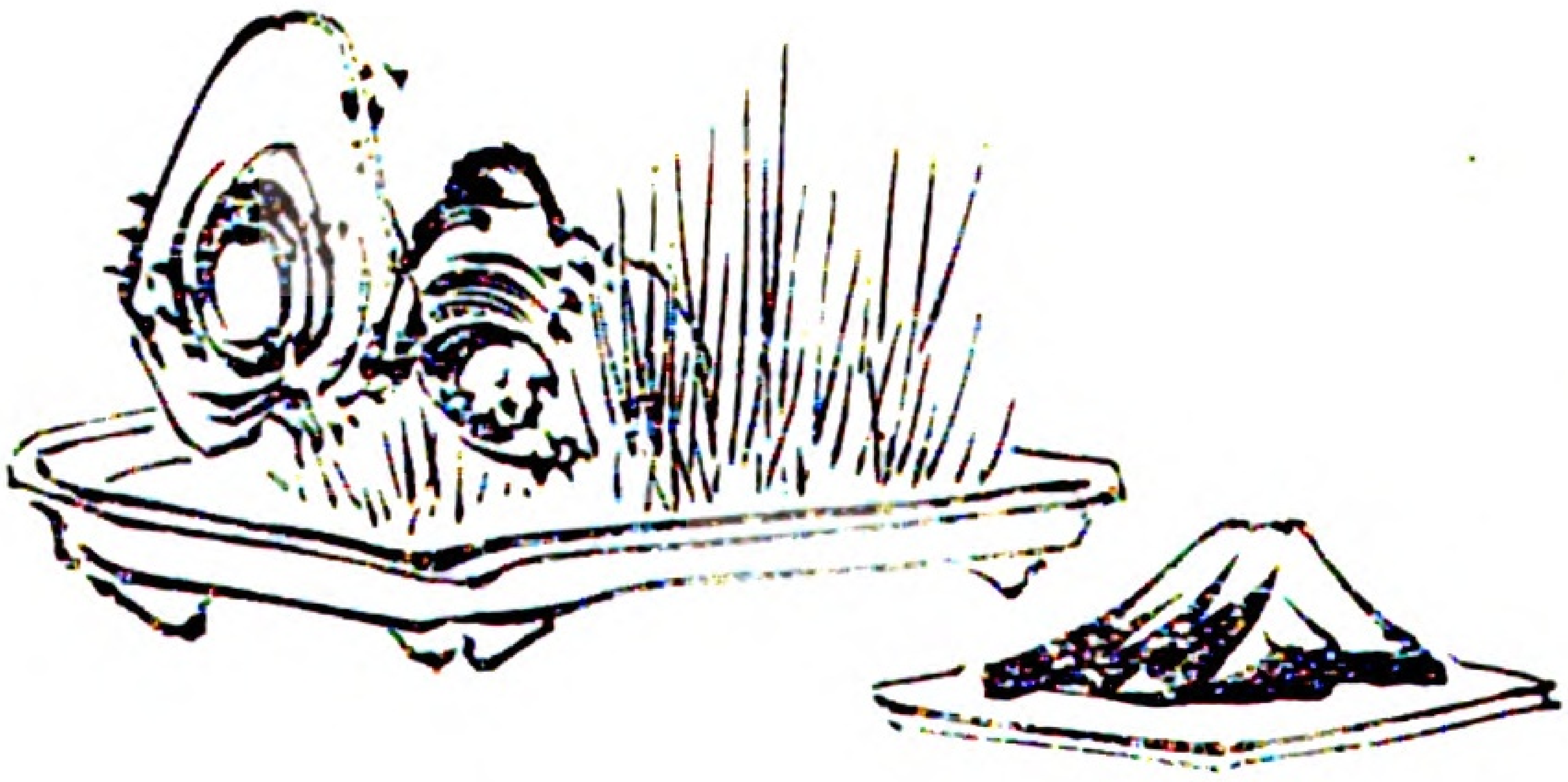
さる人老いていよ〳〵壯なる態若き人にも劣らず、氣力たしかに、長壽をたもちけるを、如何にしてか養生法を得たまひしと人の問ふに、そはこれぞと取り出でいふべき覺も無し、但だ口は禍の門といふとあり、こは言語にのみいふべきとかはとふかく心にしめて、食事に總じて十分のものは八分に食ふを常としき、われに養生法といふものあらばこれにてもやあらんといひき、味ふべき事なり。

臺所の注意

江戸時代よりの風俗習慣として東京人士の住居は臺所、雪隱等すべて汚れ易きところに意を用いて淸潔法を行ふは一つの良き習慣なるが、時も暑さにむかひ、戸棚の隅の茶碗の底にのこりたる醬油より蛆が飛び出し、煮豆の腐りたるより黴の生へ出づるなど追々臺所

の清潔法に殊更注意すべき時節となれり。傳染病流行病などはた臺所清潔法の行き届かざるより發ると多ければ一家の主婦たるものは、最もこゝに注意して拭掃除を丁寧にすべきはいふまでも無し。

不注意といふとは、輕からぬ言葉なり、不注意といふとはすべての罪、禍の基なり、交際に義理を欠くは不注意のためなり、薄着をして感冒をひくは不注意の爲なり、醫者をたのむを躊躇して病を重くするは不注意のためなり、疎忽といふと氣がつかぬといふとはおのれ悪しき念、故意にて過ちをなせるにあらざるより、さほど罪にてはあらず思ふものもあれど、故意に悪事をなすは人外の事なればいふべきにもあらねど、この疎忽、氣がつかぬといふとは實に大切なる言葉なりと知るべし容易ならどと知るべし、何か過失をなし、つい氣がつきませんでしたつい疎忽しましただけにて事はすむべし、否すみてもすまなくても氣が注かなかつたからせん方なしとあきらめあまり大切におもはぬと多けれど、これ大なる不注意なり。不注意のために人を殺すともあるとを思ひ見るべし、大なる注意は主人の役目なれど細かき注意は細君、主婦の役目なり、この邊の注意よくよく心得あつて箒のさきの塵の汚れだに臺所の注意怠りたまふな。



石菖のかげにめだかのそさひそむ

夏の臺所の注意は第一器具を多く置かぬ事なり、なるべきたけ日用のものゝ外は出し置かぬやうにすべし、さすれば一つの器を用ゆると多きが

故に、自然と清潔法行はれて、秩序もつき躰裁もよし、種々の器具をならべて便利にすぐるはやがてブセウ不清潔の基たらむ、器多ければ手數多く、手數多ければ時間を費すと多く、時間を費すと多ければ注意行き届き難きに至らむ、清潔法にかなへばまた經濟法にもかなふなり、一つの注意行き届けば萬事をよくするものなり、注意をよくせずしてむやみに拭掃除をしまたは流行病の豫防法とて藥などまき散らすともそは何の効果も無く、二階から目藥と同様ならむ、されば夏の臺所は器具を少くして手を省くを第一の清潔法とすべし、その上にて拭掃除をよく丁寧にせば、病氣などは發る筈無きなり、其他水瓶の水は絶えず新しからむやうにし且は不足無きやうすべく、石灰、石炭酸の用意もなし置きて折々汚しと思ふ所に撒くべし、夏の拭掃除はまた熱湯を必要とす、暑しとて火鉢の火に注意を怠るはまたよろしからず、儉約のやうにて不便利の結果却て不儉約なるべし。

食物としての果實

ジャムの製法　食物として菓實を用うる方法は種々あれどもジャム（砂糖にて菓實を濃く煮詰めたる菓膏）はその良法の一なるべし。

葡萄ジャム　外皮を取り去りて陶器皿に入れ、子實は他の鍋に入れて火上に懸け蓋をなし、焦げざる様注意して煮沸し、子實くづれ種子の離るるまで攪動し、火より下ろし種子をして器底に沈降ましめ汁液を注出すか若くは濾過して再び器に入れ同量の砂糖を加へて徐に煮沸め時々攪き和しながら一時間に至らば之を硝子瓶に移すべし此ところ具合あり。

桃、巴丹杏、牡丹杏、李は、ジャムに適せる良好のものにて其種子を除き、前條葡萄の方法と同じ煮沸方をもて甘味きジャムとならむ、貯蓄置くには同量の砂糖

を要すれどさしあたりの用ひ料には砂糖を少くするもよし、風味は酸氣多くしてかへつて佳きものなり、記者の田舍の宅には數株の巴丹杏、牡丹杏ありて緑滴る夏木立の陰に球を層ねて實れる美しさ、家族のみにて食ふに餘るはもとより、向ふ三間兩隣親戚等に贈物としてもなほ多く枝に殘れるを、やがてジヤムとして貯へ、折々の訪ひ來る客との長日話しの茶媒とし、食後の食品として佳きものなるを驗せり。

果實の飲料　各種の果實の液汁は水と砂糖とを混ぜてまた佳き飲料とするとを得べし、水一ガロン（二升五合餘）餘を沸煮て、酸味のある林檎一斤を四つ切にし水に入れて軟かくなるまで煮て汁液を濾し取り再び砂糖半斤を加へて煮たて、上浮を去り瓶に入れて涼しき所に貯ふべし、此割合にてすれば多くも少くもうまき林檎水を得るなり。



百合の火をともすほのかに飛ぶ螢

李水　李半斤に乾生姜二匁水一升二合を注ぎ粥狀となし濾し煮て上浮を去り瓶に貯ふ。

此方法にて牡丹杏の類を水に製すべきなり。

果樹の實蒔法

果樹は挿木接木の栽培法そなはれど、三坪か四坪の小園にて手のかゝらざるは實蒔法なり、種子を蒔くには多く秋季實の熟したるを採り地に埋め、春季に腐肉の去りたるを床地に蒔付くるものなれど熟したるをそのまゝ土中に蒔くも可なり、是は種

子の乾燥を忌むものに行ふもの多し、今眼なれたる果樹につき、蒔付の時を記せば左の如し。

名稱	蒔付
櫻桃	七月下旬又は三月
桃	八月又は三月
梨	九月十月又は三月
榲桲	同前
杏及李類	七月八日
栗	九月十月又三月
梅類	六月七月又三月
枇杷	五月六月又三月
石榴	十月十一月又三月
林檎及苹果	八月九月又三月
葡萄	九月十月又三月
柿	十月十一月又三月
密柑類	三月四月

菓樹剪定法

夏木立緑こく庭を蔽うてあまりに枝しげくなかゝ涼しさよりも鬱陶しきに過ぐるとありて剪枝むはまゝあるとなり、それにつきて菓實の樹ならば、菓實をならさむための剪枝法あるなり、不用の枝芽を除き樹の液の循環を平らかならしめ、その生育をならし、樹の形を正して、果實の大さ、味、收獲を多からしむるなり。

高木仕立　地上六尺以上に於て三四本の枝幹を出さしめ其後は外方に向へる芽を殘して枝の三分一程に切縮むるの法なり、苹果、西洋梨、桃等によし、

中位高木仕立　地上三四尺程の所にて枝幹を出さしめ後は前に同じ

矮性仕立　地上一尺五寸乃至二尺程の處より分枝せしむ、柑類、拓榴、無花果等によし、

夏季剪梢法　春芽そだちたる後夏土用頃不用の幼枝を除くなり、手段容易にして利益多し、

小兒の世界

ひよつ子の觀兵式

や、　　ゑ、

坊ちやまは餘まりの事にあきれて物も言へませんかつたが、やがて氣を取り直して、

『もう此様なつちや只は置れやしないぞ、大事の御宝を汚したら母様が御叱りなさるか知れぬが、もうもう此様なつちや只置れないぞ、ナニ只置かないつて何様するんだつて、何様したつて此様したつて見て居やがれ、ジヨンも付いてるぞ、鐵砲もあるぞ、戸を閉めて一々ストーヴの中へ叩き込んだつて譯やないや、見て居やがれ、何様するか見て居やがれ』言ひ乍ら坊ちやまは机の引出をあちこち掻き回して、麻布の御叔父様から御年玉に載いた空氣鐵砲をしきりと捜して居ますと、急に何んだか知らぬがコト／＼コト／＼音がしてヒヨイト黒ひ變てこなものが這入つて來ました、洋燈がないので何が何だかサツパリ解りませんかつたが、ストーヴの火で一寸見たとこによると、何でも半分は雛つ子で半分は鳥だか獣だか解らぬ餘程御かしなものでした、しますと、不思議なことには今迄ワイ／＼／＼／＼騒いで／＼坊ちやまもモウ我慢がしきれなくなつたと云ふ程騒いでた雛つ子どもが、アイと騒きを止めてしまつて、コツコツ机の上から飛び下りるものもあれば、紙屑籠から飛び出すものもあり、ストーヴの傍に居た奴は、道を開いて御辭義をして、中には坊ちやまの鉛筆を持つて捧げ筒などして居るのも有ました。



『ヤ、此れが雛つ子の隊長かしら』

と坊ちやま心の中で考へましたので、丁寧に御辭義をして

『今晩はおまへ雛つ子の隊長なんですか、雛つ子の』

と申しましたら、其の御化け見たやうなものはモツ躰らしく様子を作つて

『アイヤ、若樣、身共は決して雛つ子では御座らぬ、なりこそ小さけれ此れでも一人前の人間で御座る、名前と仰せらるゝか、名前は朝晩食べられ之助むかつ原の立也と申します』

『では、おまへ、むかつ原の立也てんですか、それじや立也さん、おまへ一躰何をするんですか、平常は、此の雛つ子を御存じか』

『左樣　身共は雛つ子軍隊の司令長官で御座る』

『そうですか、そりや丁度いゝ鹽梅だ、今此の雛つ子が此んなに一杯這入つて來て、悪戯して〳〵仕樣がないんだから、おまへ、此處で一つ廻れ右前へヲイをやつて下さいなチ、ほんとに後生一生の御願ひだから』

坊ちやまはほんとに今困つて困りぬいてる處なんですから、手を合はせないばかりにして願いますと、マア憎らしいじやありませんか、むかつ原とかほてつ原とか云ふ立也奴は、

『身共は決して人樣の御指圖は受けません』

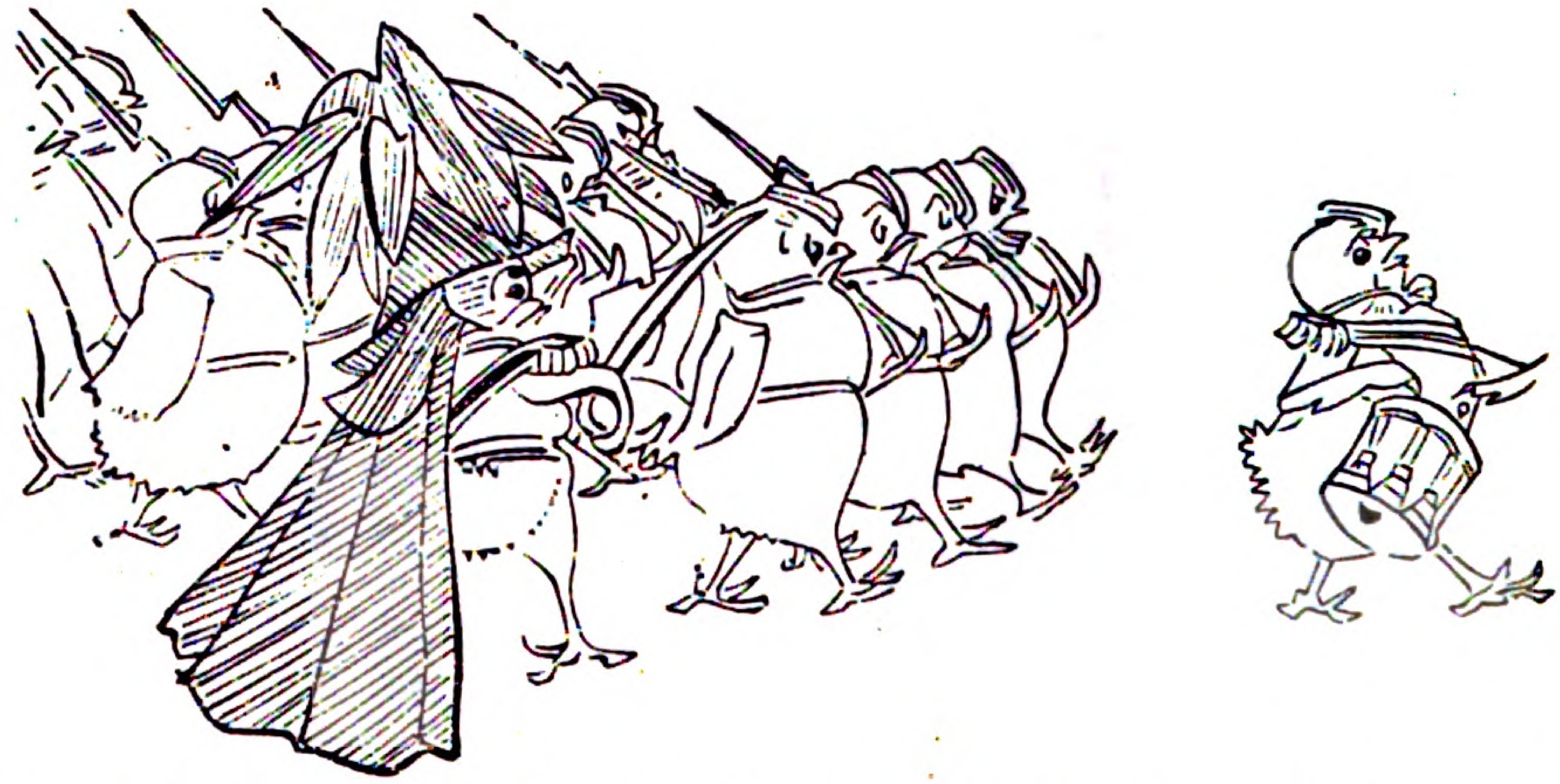
なァんて高慢な事言つて濟まァしてるんですものを。坊ちやまも少し之にはムッとして、

『それじや誰れの指圖受けるのか』

『大きに御世話です』



つて云ひ乍ら立也將軍はイキなり坊ちやまの膝へ飛び付いて、厭な顔して坊ちやまを睨めつけたので、坊ちやまはゲンコで一つなぐりつければそれつきり故、イヤと云ふ程ヒドイ目に遇はしてやらふと思ひましたが、又思ひ返して、何、此んな奴、殺したつても面白かない、まあ勘忍してやれやれつて其のまゝ構はなんで置きますと、立也將軍は



坊ちやまの膝の上へスツクと立ち上がつて、

『集まれヱ』

つて士官が青山や日比谷でやつてる通りの號令を掛けました、すると、まあ驚いた、今少し前までは威しても叱つてもチツトも云ふ事を聞かなかつた雛つ子が、瞬く隙に一ところに集まつて、チヤンと二列を造つてならびましたので坊ちやまも是れには少々驚かざるを得ずと云ふ有様でした。

『氣をつけヱー、右むけー右、四列ー、四列だと云ふにコラ四列、元ヱー此んな事じやいかん、確かりやり直ほせ、右向けー右、よし、前へヲイ、ダリミ、ダリミ、ヲイチニ、ヲイチニ組々右へヲイ、ダリミ、ダリミ、』

とう／＼雛つ子の觀兵式がはじまりました、雛つ子共は皆一様に足並揃へて、おかしな目付をして、手はありませんから、羽を振り／＼、坊ちやまとジヨンの周圍を何邊となく、グル／＼廻りしましたが、その眞面目くさつて、大股に歩く事の御かしさと云つたら、そりや御話しにやならないんですヨ。

『左に向を更へーヲイ』

今度は本當の兵隊も此んなに旨くは行くまいと思ふほど、毛筋一本の違ひなしに向を更へて、其のまゝ又進

んで行きましたが「止まれー」の號令でピタリ、幾百だか幾千だか解らぬ雛っ子はヂッと止まつたまゝ身動きするものさへありませんかつた、立也將軍は大自慢で「休めー」つて一方雛つ子の方へ號令をかけて置きながら、振り向いて坊ちやまに

『如何で御座る、若樣、御覽じましたか』

『エライ、エライ、僕の御叔父樣だつて、いくら御叔父樣だつて、此樣上手に遣れつこありやしない、エライ、ほんとにエライ』

坊ちやまも心から感心して賞めましたので、立也將軍はもう非常に得意になつて仕舞つて、前よりは尙一層樣子を作りながら、

『氣をつけー、番號』

と云いますと、右の端から、一、二、三、四、五、六、七、八、九、十、廿、卅、四十、五十、六十、七十、八十、九十、百、二百、三百、四百、五百、六百、七百、八百、九百、千、二千、三千、四千、四千まで續きました

『まあ驚いた、ジヨン四千だつて、多い筈じやないか、四千だつてサ』

坊ちやまは又御きまりのまあ驚いたを御やんなさいますと、立也將軍――少將だか中將だか、それとも大佐だか中佐だか解りませぬが――立也將軍は坊ちやまに向つて、

『之が身共の常備軍で御座る、他にまだ豫備兵も御座りまして、豫備兵！豫備兵！集まれ！

つて號令しましたら、机の引出しだの、本箱の中だの、椅子の下だの、戸の間なぞから又ぞろ〳〵ぞろ〳〵雛つ子が出て參りまして、忽ちに一大隊ほどの列が出來て仕舞いました。

『右エならエー、番號』

前と同じ樣に番號つけて見ましたら千四百八十九ありました

『千四百八十九、二つ足りないじやないか、番號が間違つとる、元ェ』

やりなほしましたが矢張り千四百八十九なので、立也將軍首をひねつて何樣云ふ譯かと考へやうとしましたら、フイに坊ちやまの洋服の衣嚢の中から

『千四百九十、此處に居るんですが、出られません、』

つてウン〳〵唸つて一匹居ました、まだ一匹何處にか居るだらふと思つて坊ちやまも、立也將軍も一所になつて見つけましたら、

『千四百九十一、キヨキヨキヨキヨキヨ――、』

何んだ、ションの頭の上にまだ先の奴が乘つて居て大居張りに居張つてるんですものを、

『常備兵が四千、豫備兵が千四百九十一合せて五千四百九十一、』

『何に、五千四百九十一、まお驚いた、僕の今までに食べた玉子と同んなじなんだ、』

『勿論、左樣で御座る、此の者共は皆、若樣の召し上がつた玉子の御化けで御座る』

『ナニ、御化け、』

『左樣、御化けて御座る、サア、此處で、降參なさるか降參なさらぬか、私共は皆一度若樣に食べられたもの故、今度は私共の方で食べる番で御座る、サア、尋常に降參なさるか、それとも五千四百九十一、一度に飛び着いて食べましようか、サア、サア〳〵サア〳〵、若樣返事はナ、何んと』

むかつ原の立也將軍は、ほんとにむかつ腹でも立つた樣に、ヒラリと坊ちやまの膝から飛び下りて、腰に下げてた劍を拔くや否や、行列作つてアレワイサのサとも何んとも云はずに控へて居る雛つ子共に

『劍つけ――、とれェ――筒』

まお驚いた、何時の間にか何處から、持つて來たのか、雛つ子は皆一樣に六連發の村田銃を擔いで劍をさけ

て、ちやんと用意して居ました。

『何様したんだらふ、何様するんだらふ、』

坊ちやまも少々氣味が悪くなつてジョンの頭をシッカリ抱へて見て居ますと、立也將軍は、一足進んで

『若様、降參なさるか、如何で御座る』

『誰れが、馬鹿な、日本男兒だぞ、雛つ子なんかに降參してたまるものか』

『それなら、一同火蓋を切りますが、宜しう御座るか、五千四百九十一、御禮の鐵砲を放しましようか』

『打つとも殺すとも勝手にしろい、日本男兒だ、逃げやしないぞ』

『是非に及ばぬ、御あきらめ遊ばせ』

つて云ひ乍ら、立也將軍、軍隊に向つて、

『用意、ねー、てー、』

ドン〳〵〳〵〳〵ゴーッと云ふ雷でも落ちたかと思ふ様な音がしましたので、坊ちやまは、胴ぶるひしながら、しつかりジョンの首へかぢり付いて、氣も何んだか遠くなつたやうに只桑原々々桑原々々つて云つてましたが、

●●●●●

まあ驚いた、ヒヨイと頭を舉げて見ましたら、自分は怪我も何んにもしなくて、雛つ子の影も形ちも見えず、ジョンが元の通り自分の膝の上へ首を乗せてゴロ〳〵ゴロ〳〵云つて居るばかりなんじやありませんか。一体此りや何様したんだらうと思つて、目を擦りながら見れば見るほど御室はもとの通りで、一向雛つ子の這入つて來た様子もなく、窓の外とでは風と雨が前よりもヒドク怒鳴り合つて、何時もつて來たのか、机の上には清やの御得意のヲムレツがもう冷たくなつて乗つて居ました。

（終）



平田久著

十九世紀外交史

定價五十錢　郵税六錢

國際の政局東移して支那大陸は歐洲列强の射獵塲たらんとす。支那問題を解釋せんと欲せば、先づ十九世紀歐洲外交の大綱を知悉せざるべからず。本書を讀まば歐洲に於ける均勢の成立を了解すべく、歐洲に於ける均勢維持の緊密なる所以を了解するは、東洋に於ける均勢轉化の急激なる所以を了解する第一段也。

平田久著

露西亞帝國

定價卅五錢　郵税六錢

日本國民は最も深く露西亞を研究せざるべからず隣國として研究せざるのみならず、露西亞は時々刻々、日本に向つて露西亞の研究を强いつゝあり。露西亞の天然地理人情歷史より其の膨脹、其の政策、其の國力、其の列國との關係を詳論したる本書は、露西亞を研究せんと欲するものに鮮なからぬ便宜を與ふべきなり。

發行所　東京市京橋區日吉町四番地　民友社

○小兒○はよく肥へて笑ひ顔の愛らしき筈のものなり痩せたる小兒は興味掛きものなり之れには彼の有名なる肝油の精と次亞燐酸とを配合して飲み易く且つ味ひよく製造したるスコット乳菓が最も適當なる食料にして忽ち肉を肥し發育を助くるなり◎此の乳菓が滋養分に富むとは他に比類なきが故に虛弱なる人々は之れを用ゐて奇効を見べし

特に虛弱なる婦人は一度之れを服用せば忽ち健全なる身躰となること疑なし

○咳嗽及風邪○は病の初めなり、次に來るものは肺の衰弱にして身躰を痩せしむ、最後に彼の恐るべき肺病の萠芽を顯すなり彼の有名なる肝油の精と次亞燐酸の調合物なるスコット乳菓は能く咳嗽及風邪を去り肺臟を強くして活力を與ふること實に驚くべし◎◎◎此の乳菓の洪大なる滋養分が嬰兒、小兒及虛弱なる母親を益すること實に大にして、其味も至て滋味なれば喜で服用するなり

此の乳菓が精氣を增し滋養分多く最も効驗あるものなるは世界の大醫の擧て證明するところなり

○スコット乳菓の說明書御入用なれば横濱八十九番日本支那貿易商會へ此の雜誌にて御承知の旨御申越あれば無代價にて呈す



左の大取次所の外各藥舖にて賣捌き居れば御購求ありたし

横濱境町	友田嘉兵衛
仝境町	鳥居德兵衛
仝太田町	大川佐兵衛
東京本町四丁目	島田久兵衛
仝室町	資生堂
仝本町三丁目	島田忠兵衛
大阪道修町二丁目	小西儀助
仝道修町二丁目	武田長兵衛
仝道修町三丁目	田邊五兵衛
仝道修町二丁目	田畑利兵衛
仝道修町二丁目	福田清右衛門
仝道修町二丁目	鹽野儀三郎

小說

おとめの記

橋亭主人

(一)

嘗て北海道移住開墾の勸誘ありし時、日常暴利心と冒險心に富む我が近村の人心は一時動搖の波に漂はされて、家財田畑を他人に賣渡し恰も黄金の充滿せる國へ行くが如き希望にかられて北の方風雪多き極地に赴むいた。

然れども、彼等が一旦彼地に着き、彼地の風土に其生活を始むるや、豫望は想像と齟齬ひ、禾穀は自ら田圃に出來るものならず、黄金の樹木は兼て彼等を待ち設けなかつた、只だ日として見るところのものは凍雲を送る長天、劍の峯より吹き下す飛雪、荒漠茫涼の草野、くらき莽蒼の外耳目に觸るゝものなく、其代りに失望、戀郷病は朝な夕な其心を奪ふて、故郷に傳ふる音信は怖ろしき熊、荒らき羆の話の外樂しき手紙とて來るは甚だ稀れであつた。

されば此節になつては人心も弛んで來て一度緊めた行李の紐も再び解き返す樣になり、是れより後は最早北海の夢想談もなくなつて、何時しか深い忘却の底に埋められて了つた。

併しながら明治十六年は來て、久しく靜寂なりし村落も三月の頃より人心再び膨脹して何處ともなしに騷がしくなつた、其故は、一時眠つて居た冒險心の上に、北海道とは天地の別ある布哇出稼の大金儲が村々戶々に說き勸めたからである。

今や死せる北海道の過去は生きたる布哇の上に蘇へつた、何れの畑に行くも何れの家に行くも何れの道に逢ふも村民が話の題は此島の事情でないものはない、さ

れば五反の田地を一生の樂園として耕やす助藏といふ壯年も、世に何の累なく唯だ子孫の勤勉を樂む九兵衛といふ老人も、此の風潮に漂はされて動搖の一人となりたる程なれば、血氣壯んなる村男や、鋤鍬に慣れたるおてんば娘は田畑の仕事を投棄てゝ、布哇へ布哇へと叫びつゝ各戸の間を狂奔する樣になつた。

かくする間、年老ひたる親の留むるをも聽かずして無理に渡航を企てたるもの、又は親兄弟の大賛成を得て發途の決心をなしたるもの、又は最愛の妻を離縁したるもの、又は俄作りの夫婦となりたるもの等種々雜多なる狀態にて、玆に三十五人の一隊は村中に出來た、今銘々個々の腦髓を分解て見れば富貴、黄金、榮耀の光明世界は彼等の全身に充ちて、北海道の前例を引く老人達には耳も傾けなかつた。

出發の日漸く近かんとすれば準備も怠りなく、近隣の族は此遠征者の爲めに送別の宴を張り、遠村の親族等は一生の訣れと思ひてか杖に倚る老人、草鞋がけなる若者となりて村の四方からは入つて來る、そして終日終夜酒樽を敲く音、雙手を打つて田舍歌に調子を合はす聲は恰も年中一度の祭禮の樣に、皆な活々して前途の成効を高言する。

此動搖が離別宴會の歌と共に消へた後は、心頭に始めて涙を覺ゆるの日となつた、何ぜなれば狂奔の熱も今はの際となると醒めて、偖ては端てしなき萬里の波路、生死分けぬ年月の訣れが涙の底から湧いて出て、今ま捿み馴れし軒下を出で、葡萄の這ふ棚を潜り、釣瓶懸る井戸の邊りに添ふて、涙ある父母妻子の眼を眺め、愁氣なる兄弟朋友の顏を見し時、暗憺たる悲哀の情は玆に始めて遠征者の腦髓を打つた。

此一隊の中に牧田三五郎といふ男がある、彼れは本年二十五才、色黑く丈高く筋骨逞ましければ健康の點には第一で、加ふるに酒を飮まず烟草も吸はず、頗る勤

勉質素に生活した故第一番に分限者になつて戻るのは此男と村中の評判である。

辛抱して戻れ、達者で働けと老人等のくど／＼云ふを聞き、路ち／＼に暗淚を落しつ又は今更となりて妻子に未練を殘す一行の中より、淚も落さず女々しき言もなく一本の蝙蝠傘と一提の革袋とを提げ、山高の帽子を被り磨きたる短靴を穿ち、離別の挨拶、一言一語の間自ら壯大の意氣みち／＼て見へしは彼れ三五郎一人りであつた、然れども其内心――布哇へ行かなければならぬ境遇幷に行くに就ての血淚の事情は誠に下の如くであつた。

今、三五郎が此日までの來歷を言はむに、彼れは世に薄倖なる一人である、長子なれば富める其家を繼く理なれども、悲しいかな幼き時實母を亡ふて、繼母掛りの身となつたのである、丁度前年の春頃まで其家に居たれど、繼母といふは性質が陰險で邪智で年來彼れを



なかなかにひとりあればぞ月を友

虐遇げた上に、常に一家の承繼を奪ふて其實子――三五郎の爲めに異母弟――なる久吉に與へんことを圖りつゝあつたので、家は數年の間平和を得ず常に紛擾鬪着を極め、愉快なる日とては一つもない、善良なる父は之を憂ふといへども實母の權威の爲めに壓せらるゝ許りだ、彼れは之を見る毎に心甚しく憤懣に堪へざりしが、一先づ思ひ斷つて生家を出で、强て一時の商人となり又は他家の奴僕となつて不愉快なる家庭に遠ざかつた、通常此の如き境遇に陷る青年は忽ち自暴自棄に身を持ち崩すもの

であるが、感心なのは三五郎で少しも自己の本心を動かさず、ヂツト胸を焼く炎を抑へて耐忍たのである。かゝる不如意、不平なる身の上にも彼れに慰を與ふるものはあつた、如何に堪忍強き三五郎なればとて、自ら一人前の男として生れ、一家の長子として生れたるにも係はらず、彼のいじわしき繼母の爲めに傳來の田畠を他人の手に奪はれねばならぬかと思ひ到るときは、胸も破裂けむ許りなりしが、しかし、自分を慰め、自分に同情を注ぐ其人と一夜の燈を分つときは、其煮へかへりたる腸も忽ち靜まつて愉快なる青空を眺むる心地かした、實に此塲合にかゝる活ける泉がなかつたならば人は到底生活し得るものでない。

其の活ける泉といふのは、隣村の處女名はおとめといふものであつた、彼女今年二十の妙齡にあれど、幼少の頃より裕かならざる生涯をして來たゆへ、世の中の憂き事に心を配ることいと多く、村落に噂する三五郎の身上に就ても他のものよりは一層多くの同情を寄せて居つた、況して生家の富裕なるに時には海魚を擔いで彼女の家に來り、時には豆腐や蒟蒻を鬻ぐ姿を見、又は或時は他家の爲めに鋤鍬を執る樣を見て、如何許り痛いたしい氣の毒だと思ふ念を起さしめたか！如何許り其の心の琴絲を動かしたるか！今やおとめの心中には同情といふ觀念よりも、可愛相にと思ふ情よりも、既に愛といふものに其胸を刻まれてをるのである。

失意の人は同情ある處に集まるとは誠に眞理で、三五郎もおとめの家に鬻ぎ、おとめに道に逢ひ、おとめと話し且つ語り其物柔かなるを觀、其淚多きを觀、其能く家事に勤むるを觀、其我れに同情を表し居るやを思ひて彼女を見る毎に惡くは思はなかつた、故に、雨ふりて商賣に暇あるとき、又は夏の夕の凉みには何時もおとめが家の置座の上であつた。

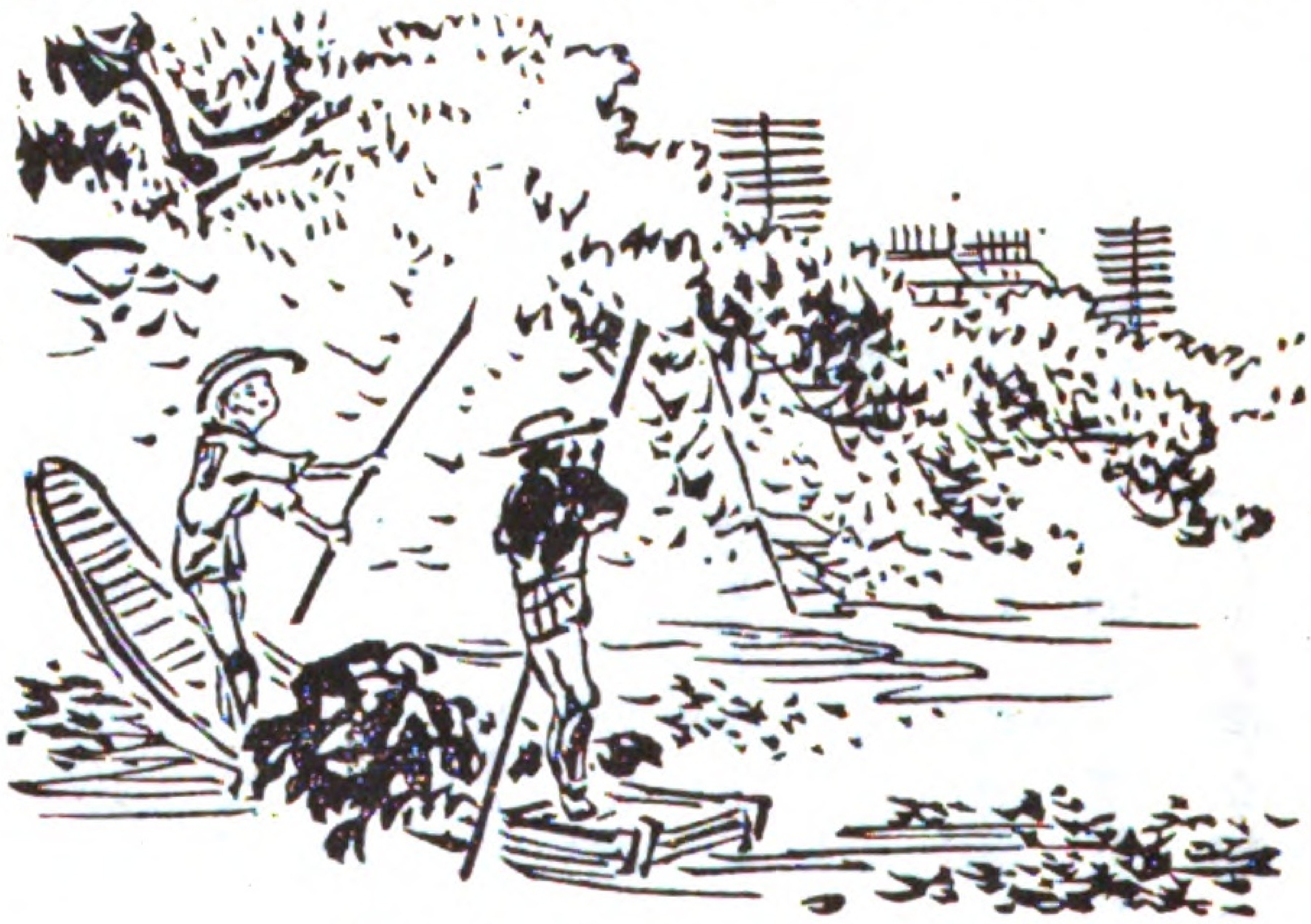
斯くして此の兩者は人の噂に上らざる内、既に愛てふ

翠の野に其永遠の情を契つたのである。

* * * *

今や三五郎は味方を得た、同感情の味方を得た、戀人といはむよりは寧ろ妻と呼びたきおとめは彼れが人生の基礎となつた、彼れは此基礎を得しより以來、家督、相續權、財産權等の名目は何等の價値もなく、唯だ此の最愛なる味方と共に、假令いぶせき賤が家なりとも此日を樂しく暮さむこそ何より幸福の事と思ふた。

此く決心した所で、彼れは久しく歸へらざりし生家に到り別家の許を父の膝下に請ふた、財産分割に就て凡百の紛紜があつた其末、僅に家資五分の一を得て茲に平安なる小天地の經營に着手した。



瀨の花や片われかちの月の澄む

碧水の流る丶涯、渡舟の客の往來する邊り近頃新しく建てたる藁七分瓦三分の家がある、店には菓子、野菜、草履、傘などを並べ、旅人の脚を休むる茣座店頭に川風を受けて、數畝の畑其の邊りを繞ぐつてをる、是れ即ち三五郎が暗黑なる谷間を出で丶樂しき人生を送るパラダイスである。

布哇遠征事件の彼等が春夢を驚かしたるは夫婦となりて一年の後であつた、三五郎の心中を能く考へて見れば、繼母の虐待、家資分與の酷薄が殘念で堪まらず何時しか鼻空かして呉れむと思ふ心は十分ある、おとめにも其趣を語れば、三年の間には本家の上手を越すやうにする積りで共に稼がむと健氣に謂ふ辭に、三五郎も一倍の勇氣を得て、おとめは店

を、自分は近郷を馳せ廻ぐりて綿、繭を賣買した。
されど人生意の如くならずとは矢張り三五郎の上にも免かれないので、今年彼れは繭を買ふて大分の損毛を招き、加ふるに秋の央大雨降り續いて讓り受けた多少の田畑に河水汎濫の禍を蒙つて、彼等夫婦は樂園の中轉た失望の雲に掩はれつゝあつた。

（三）

一村は動揺隊が出て往つたと共に悠々たる天地に返つた、其れから後といふものは、鍬によつて朝日の昇るを眺むる老人も、夕暮の窓に機織る家婦も、柳の蔭に釣を垂るゝ村夫も皆な長へなる空を眺めて、其子女、其夫、其兄弟が安着の報知は何時なりやと、毎日毎夜待て居る。

おとめにも待詫ぶる五本の指は幾度か數へられた、一行の出立して殆んど六十日許り過ぎし頃、此村在つてより以來始めてなる横文字の郵便は各々の家に配達された、おとめの家は村の入口なれば萬里鴻雁の音づる聲を聞くも、他のものよりは三聲四聲早く其無事到着の報らせを請ける、彼女は其れを請けるや否や逸早くも里なる父の許に走つた。

來信の心は、海上は無事にて着きぬ、今は三十五人も散り／＼に分れて、自分はホノルヽといふて日本の東京如き都より十里程隔ちたるアチカラと名くる處に來り、其處に建ちたるコンダリニク會社に傭はれ、砂糖製造に從事す、給料は當分一弗で日本の一圓餘りに當り、働く時間は朝の五時より夜の八時まで等の雜報、之れに書き添ゆるに立派なる船、家屋、道路、宏大なる機械、華美なる風俗等を記し送金の豫算まで、細ま／＼と書き加へてある。

おとめは父の眼鏡越しに讀み聞かすを手に取る樣に聞き、喜び極まつてシク／＼泣く、急ぎ歸つて其母（三五郎の出立後は里なる實母を呼び寄せて同居せり）に

此くと告げ、御祝の御酒は直に神棚に捧げられた。其日の暮には早や天外よりの音信、全村を通じて聞こゑ家族の者は相互に同行者の父母兄弟を尋ねて喜ぶ、風呂屋は例の如くに此話に依つて囂しく、若者の集會場には腕押、枕引、坐り角力等の騷がしき音なき代りに、冒險羨望談は一夜を塡める。

* * * * *

光陰は流れて其年の秋は來た、今夜は十三夜樣でと裏口の戸より空を眺むるおとめは俄かに産氣附きて第二の三五郎は產れた、其は三五郎が願つて置いた眼球の黑い男の兒であつ、た。

今や寂しき此家も最と賑やかになつた、是れまでおとめの眼に映つるものは、唯だ其母親と、班毛の猫と、家の前を流る丶水と、向岸なる森と、其の左りなる赤土の丘とのみで、何ちらかといへば寧ろ哀れを添ゆるもの丶みなりしに、三五郎が兼て命名して置いた周造といふ此嬰兒が生れてより以來は、おとめは恰も陰沈なる思案より生き返へりたるが如く、其寢ねたる顔、乳を呑む顔、笑ふ顔を眺め、其を抱いて夕空の水端に立ち、其を背負て八幡の宮に夫の無事幸福を祈る道すがらも、常に三五郎と共に居る心地して、悦び樂しみは胸に滿ちた、年月が經てば段々人の眞似をする、お頭てん／＼、かほ／＼も出來る樣になる、ついには赤かべその用らぬ事まで覺へる、おとめは其れを見ると眞んとに嬉れしくて耐まらぬのである。



語る聲に風かほるなり夏木立

されどおとめは心配した、何ぜなれば、他の家には大概一ヶ月に一度づゝは手紙が來て各々其無事を報じ且つ多少の送金があるといふことを聞くのに、三五郎よりはたま〳〵の手紙で、出立の後僅か三度の外音沙汰もなく、且つ大事な金は一文も送つてよこさぬ、おとめは其れを心配して若しや首尾でも惡るいのかと夜半の枕に問ふて見ることもあつたなれど、我夫に限り落度はあるまい何か考へがあつてする事であらふと信じ、餘り苦にはせなかつた。

おとめの信ずる所は眞である、丁度三年目の春に三百五拾圓といふ大手形は三五郎から來た手紙の中に封じ込んであつた、おとめは之れを見しとき如何ばかり驚いたか、如何許り喜んだか、如何許り嘗て疑つて見た事を愧ぢたか、而して、其手形を表より裏へ端より端まで洽ねく見たる後、俄に袖もて眼を掩ふた、薄暗い製造場の中で汗膏を流しつゝ心骨を碎く所の其夫の姿が目の當りに映つたからである。

其時三五郎の手紙に、周造は日に増し成長するや、本家の父上は無事なる樣子かを尋ね、次に此大金を貯蓄したるは此く〳〵と、其粉骨砕身、苦慮慘憺の有樣を書き記し、最後に向ふ一ヶ年間に猶ほ是れ丈けを貯蓄して歸らむと其壯圖を書き加へてある、而して猶ほ呉れ〳〵も賴むと書いてあるのは、自分が此樣に身が健康で働けるのは畢竟氏神樣の御護に因るゆへ、何卒此金の中より石の鳥居を作つて八幡宮へ献納して呉れといふのである。

おとめの返事に、周造は日々成長し今はとゝか、ゝ、の語も僅かにいひ得、また大鼓抔敲きて遊びぬ、本家の父上は無事なれど餘程衰へ給ひしやう見ゆ、多分卿の身の上を氣遣ふてなるべし、妾も卿の骨折り一方ならぬを想ひやり一日も忘るゝひまなし、祈願の爲め日々八幡樣へ日參致しぬ、去年の冬布哇行のもの丶兄弟た

ちは皆な〳〵伊豫石槌山へ無事祈願の爲め罷り越されしも、妾は無人なれば其組に加はるを得ざりしが故に代人を出しぬ、鳥居は直に建て可申、今年暮れなば來年は必ず歸へり給へかし云々。

其後三月許り經て白崎八幡宮社殿の前、緑樹青松の欝蒼たる所へ一基の石造鳥居は新らしく建てられた、「在布哇國氏子中津村牧田三五郎建之」の文字は黒ろ〳〵と献納者の名をあらはしてある。

村のものは頻りに三五郎を褒めたゝへる、兼て彼れを同行者中の第一なりと評したる老翁は其豫言の適中せしを誇りて人々に高く示し、嘗て彼れを傭ひ使ふた酒屋の主人は頻りに其の當時勤め向の忠實なりしを說き、おとめが生家の隣に棲む老先生はおとめが人を見るの明あるを賞め、知る知らぬ人皆な三五郎の成功を近村に傳ゆるものから、おとめの身は宛ながら榮光の本躰の樣に、他人に羨やまれ、心中誠に嬉しくて堪まらぬ。



さんぼつりけふはごこまでいつたやら

村民が牧田三五郎の成功を以てますます布哇の黄金國を夢想するの念を高めたが、茲に突然悲しむべき凶音は此の樂しき村中に落ちた、それは布哇出稼中なるおくまといふ少婦と、仁三郎といふ壯年が前後相繼で黄熱に斃れたりとの報知である、其のおくまといふは布哇行の爲めに忠吉といふ男と新に結婚して行いたる者、仁三郎は一家の生活思ふ樣ならざれば獨りの母と啞なる姉とを殘して三年間の渡航を思ひ切つて行つたのである此凶音が來ると彼等の悲し

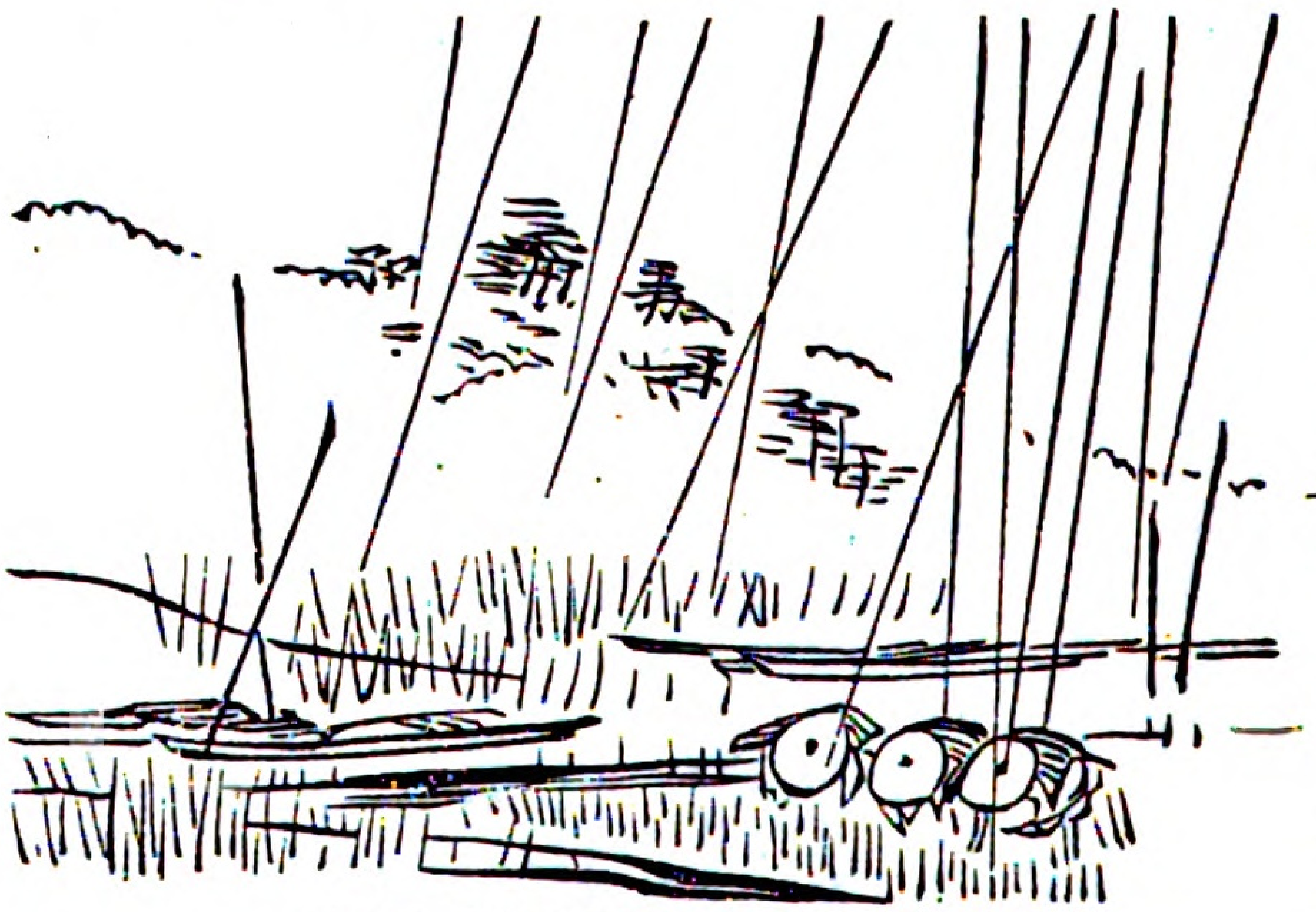
み嘆きは一方ならぬ次第で、おくまの母親は何ぜ行く時に留めなかつたゞろうと身を切る樣に泣く、仁三郎の母は氣絶して倒れ、啞なる姉は犬の吠へるが如き聲をもて語に現はし得ざる悲鳴を揚げ痛み悶へた、嗚呼悲慘なる此光景！如何に村人の心を跳へしたるぞ、况んや彼地に骨肉を送りたるものは如何に其の肺腑を擊たれしぞ、今まで布哇々々と呼びなせる歡樂の聲も、何時しか沈鬱なる人氣の中に埋められて、何所ともなく怖わ味を抱くやうになつた。

おとめは憂慮するもの〻中で第一の心痛家となつた、假令三五郎から來る手紙は常に健康を報じて來るとも、人間の生命程果敢ないものはない、唯だの去年始めて束髮といふものを結ひしおくまの赤白き顏や、始めて洋服を着たる仁三郎の笑顏を見て、港より別れしも今は最早や敢なくなつて親兄弟に死際にも逢ふことが出來なかつた、無ぞ死ぬる時などは會ひたかつたであらうが、眞んに可哀相な事だ、其れは先づ他人の身の上として三五郎ぬしは今頃は如何して此夕を暮らし給ふか、近頃手紙の來ぬは若しや病氣にて臥し給ふのではないか、思へば世の中は憂き事の絕へないものだ、此頃の夢見の惡るさ、十日前に見たる三五郎主が濕れた着物のまゝ前の川から上がつて來ておとめ今戾つて來たと、いふたま〻消へて了つたが、眞んに變な夢と思ふて居るに、又昨夜見たのは又變だ、三五郎ぬしが金箱二個を擔いて歸り望は是れで成就したといひしや否や何處へか出て去つたことゝもは、誠に氣懸りの夢だ、それとも餘り心配するから箇樣の事を見るのかと、おとめは獨り思ひつゞけば人の心に察しのなき夕烏は前の森に歸る道すがらかあ／＼と鳴く聲陰氣に聞こへていとゞ悲し。

昨日の喜びは今日の悲しみとなつたおとめは、夫の身の上心配で堪まらず、最早や三百圓ありとも五百圓あ

りとも、又千圓ありとも、夫の一身に代へ難い、早く殘る歲月を縮めて其歸來を一時たりとも近づけんと、焦ら立つ、されども日月は彼女の爲めに出來たのではない、思へば思ふほど遠く永い心地がする、心地がするほどます〳〵氣が亂れる、果ては此次に來る郵便は三五郎ぬしが死んだといふ報知かと思ひ込む、君よおとめは將に半狂の境に落ちんとしたのである。

迷想は煩悶を產み、悲感は惑亂に導く、此くの如き場合に訴ふべきものは唯だ神樣より外ないのである、おとめが周造を其背に負ふて八幡宮の祠に跣足參りをする有樣は、見る影も可哀想なやうで聞く人每に同情の淚を注ぎ、若し三五郎の身の上に本當に間違ひがあつたなら、おとめの



さつき雨田毎の闇となりにけり

身は如何んになろうかと、村人は蔭ながら心配をする位であつた。

あはれ、虫が知らすといふ語は誰が言ひ始めたものか、おとめが此く心配する如く三五郎は死んだ、眞んとに死んだのであつた。

此報らせが到着した時に、村の者は再び愕然の淵に投ぜられた、おとめの驚愕は失心以上だ、其有樣は最早や言ふも疎かだ。

おとめは三日の間は全然で人事を辨へず無言の中に倒れ臥した、四日目の朝漸やく細い目を開いて人心は付いたが、人心が附けば悲しい淚が出て、却そのまゝ死んで了つた方がよかつたと思ふ。

おとめは此る劇烈なる感情に撃たれし故に、此後二三ヶ月といふものは恰も喪心者のやうに、惘然として何事にも氣が拔けて居る、段々と治療するので稍々其の本心に歸るは歸へつたが、身躰は餘程衰弱に陷つて半年が程は床の中に臥して居つた、おとめはつく〴〵過ぎ來し方を憶ひ起して歎き悲しむ、樂しいと思つた事は素よりのこと、悲しいと思つた事まで、みんな昔の夢となりぬしの爲めに百度の足跣參りも、無益な空頼みで、献げたる鳥居も丁度石の墓を拵らへた樣なものだ、あれだけ魂を罩めて御願をしたのに、八幡樣は聽いて下されぬか、八幡樣には耳がないのか、心はないのか、八幡樣、八幡樣、百度の跣足參りをしたのは御墓參りをしたのではございません、アヽ世の中には神も佛もないものかと、いろ〳〵の愚痴な思いが胸を亂麻の樣に搔き亂だす。月の照る晩、雨の降る夜、三五郎が亡き跡を懐ひ出しては此く焦がれ思ひ、其度毎に周造を抱いて哭く、今歳四歳なる周造は母に抱かれながら、母の瞼から涙の出るのを見て、自分も眞似して泣く、其傍で親子の此樣を見て忍び泣きをするものは、おとめの實母なりけり。（未完）

雜録

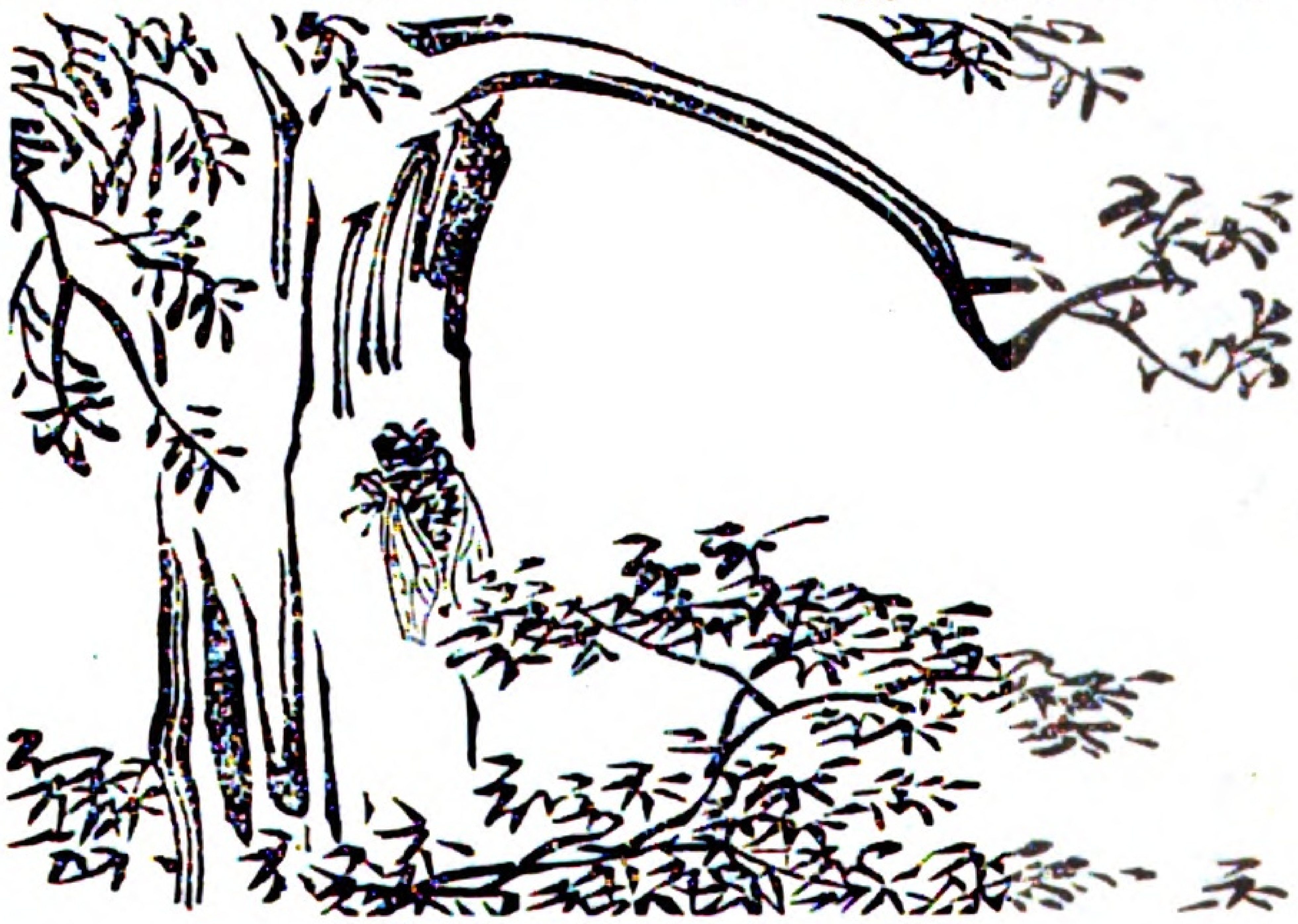
日用叢談

◎鰹魚節の事

露松生

「エキス」といふ言葉を始めて聞き「エキス」といふ物を始めて見たる人々の、異しみ愕ろき、感嘆し、稱賛してあはれ、我が國にもかゝる調法なるものゝ製法あらまほしけれなど、思ひ、わざ〳〵肉液をしぼりて調製を試むるものもありとかや、されど我國には古來松魚節といふものあり、格別珍らしき品とにはあらねど庖厨の用を幇くるに是れ程調法なるものはあらじ、年來使ひ馴れたる事とて何人も其の物の珍らしくおも

はざれど、三度の食に米の必要は第一ながら家々の臺所に松魚節なくては事缺けぬべし。是れを携帶して旅行する人の萬一の時の口糧とも爲さんか、實に其時の効用は測り知られざるなり、先年清國と戰爭の砌、或る士官が物に試しある其の母の注意もて、數多罐詰の外に薄く削りたる此の物の佃煮一と包み大行李の間に收め置きけるが、三伏の暑さに行軍に疲れたる將士の大方は肉の臭味今更鼻を衝きて何分にも喰はれざりし其の折、松魚節の佃煮とて一と撮みづゝ賞翫なせしに何れも大きに食味を幇け意外の好結果ありし試しは今猶其向の人の語り草として殘りぬ猶又食物の養分に就いて年來研究し來れる何某學士の話しにも松魚節の煮汁は生牛の液ほどに効能なしとするも食味に異臭を厭ふ病人などの之を用ゐなば鷄卵、米粥などより優りて滋養になるべしといへり。それも日本人口より出でし事とて有難からずおもはゞ或る西洋醫士の言を引いて言ふべし、曰く松魚節は日本特産の肉「エキス」なりと。反省して其の効用のあるを知るべし。



蟬なくや夕立すぎし大樹

壺及び甕の事

西洋及び支那にて酒、醬油など流液物を容るゝ器の大凡は甕若しくは壺なり、日本にても大概同じ、されど我が國にては桶、若しくは樽の調法に製らはれたる器物のあるより、日頃持ち運びの爲めには彼方よりも寧しろ此方を使用するの便利なるものから容量の大きなる陶器はあまり用

ゐざるなり。元來壺、甕の類は質の割合に重くして物に依りては中味の品より容物の重量の却て重きに過ぐるものから取扱ひの極めて不便にして、粗忽に扱へば缺け破はるゝ恐れのあるものから要鎮の爲めとて大方は藤蔓、蘿などにて造れる編み物を被らせて周圍を括りぬ、我が國にても數多の器を使ふ家々にては太き苧麻の細もて綴れる編み物を覆ひて、是れを扱かふに大事を取りける。

燈火の事

裸火を點すは野蠻國の習ひと言ひしものゝありしが、これとて強ちには言ひ難きものなり、成程我が國にもむかしは松明を燃したり、衛士が松明を燃きて天子行幸の道途を照らしたる事古るき物の本にも見えけるが、その節の燃火と言へば大凡は松明なりける、篝火なりける、若侍が伴部屋にて雜談せし折にも松明の光り明滅によりて切れ目を付けしとなり。朝鮮の内地に於ては今も猶ほ松明は普通の燈火なり、少しく進みたる生活の趣きを學ぶもの、牛脂を燃くか、開港場に近き村落にて僅かに石油を燃くに過ぎざれど、それすら燈明はやはり裸火なり、いゝで、かんてらの裸火なり。津々浦々如何なる山里に入るも今は洋燈といふものを知らぬ人なき程に生活の進歩せる我が國にては「カンテレ」は燈火に於ける最下級の器として一種の蔑視語とはなりたれど、十八九年前までは戸數千軒の町に「ランプ」を點す家は十軒か十五六軒數ふるに過ぎざりし事さへありし。

此の時代より猶十年もむかしへ立ち歸りなば日本國中の夜を支配せし燈火は菜種油に燈心燃やせし行燈と蠟燭立てたる燭臺の外にはあらざりしなり。行燈は裸火を覆ふ爲めに作られたる奥床かしき器なりしかとも、尋常のともし火としては、光り淡くして店頭などには

不似合なりしが燭臺は華を飾らんとしてなか／＼に贅澤の數を盡され壽賀、婚禮の席などには今も猶なくて叶はぬ器の一つとされたりき。

瓦斯、電燈の夜の市中に滿開する時節となりし當今の眼より見て、そゞろ不思議に感ぜられしほど隔世の觀をも爲しける者は、夜市に立ちし蠟燭の光りにぞある我等が見覺へて記憶にのこれる去る魚市場にては五六十人の魚買人が一と所に集まりて附木に字を書き手帳調ぶるに其が便よりとせし燈明の蠟燭は、重目三百目掛とて宵のくちより燃し始めて翌る朝の黎明まで十二時間熄間なくとぼりぬ。今の車挽等の調法とする糸心は巧みに作られて四時間といへど實際二時間に過ぎざるなりこれにておもひ起すは田舍芝居の指燭なり。俳優の鼻頭に燭蠟指しつけて眉を焦かしたるも幾度なりしぞや。



苗賣の市にて見たり初茄子

竹細工の事

竹細工は日本特有の工藝なり、笊にも作り、箕にも作り、籃にも作ること、いにしえより傳へ習はせる細工の器用一々いふまでもなし、何程調法の品なるべきかは、假りに家の内より竹もて造れる器を除きて見ての不便もて知るべし、臺灣、若しくは支那の南方に竹を産する多けれど、大概は椅子、寢臺、床几の如き室内器具のあらましに過ぎず、組みては行李に造り、夏の敷物となし、編みては簾となし、簀の子となし、贅澤なるは下駄の表に作り、凝りたるは

食箆に、拵らへ、軸にも、管にも、團扇にも、花活けにも印籠にも、茶盒にも、又た大きなるは竹刀より、小さきは耳掻に至るまで、杖ともなり梯子ともなり、直ぐなるは雨樋となし、筧となし、曲げては輪となし箍となす、千百と數ふる植物の中に就て竹ほどに器用の廣くして効用の大なるものあるを知らず。西洋の人が鐵を自由に使かふ程に日本の人は竹を自在に扱かへり。

モロカイ島を訪ふ

（南洋紀行の一節）

半　山

あまのはら、ふりさけ見れば、波路遠く空はるかなる南の洋に、船枕かさねし幾夜の後、モロカイの島根を訪ひしは、昨日の夢と過ぎて一年、こゝに記するはその折の日記の一節なり。

甲板の上に布團敷きて枕高く一睡りの後、「はや陸地見えたり」と人々の呼ぶ聲々に、醒めし瞼を擦りつゝ起き出でゝ彼方を眺むれば、梢の影無き禿山は、突兀として我前にあり、モロカイ島の東の端と知られける、船は今此南岸に沿うて上陸すべきカラウパパ村にと向へるなり。

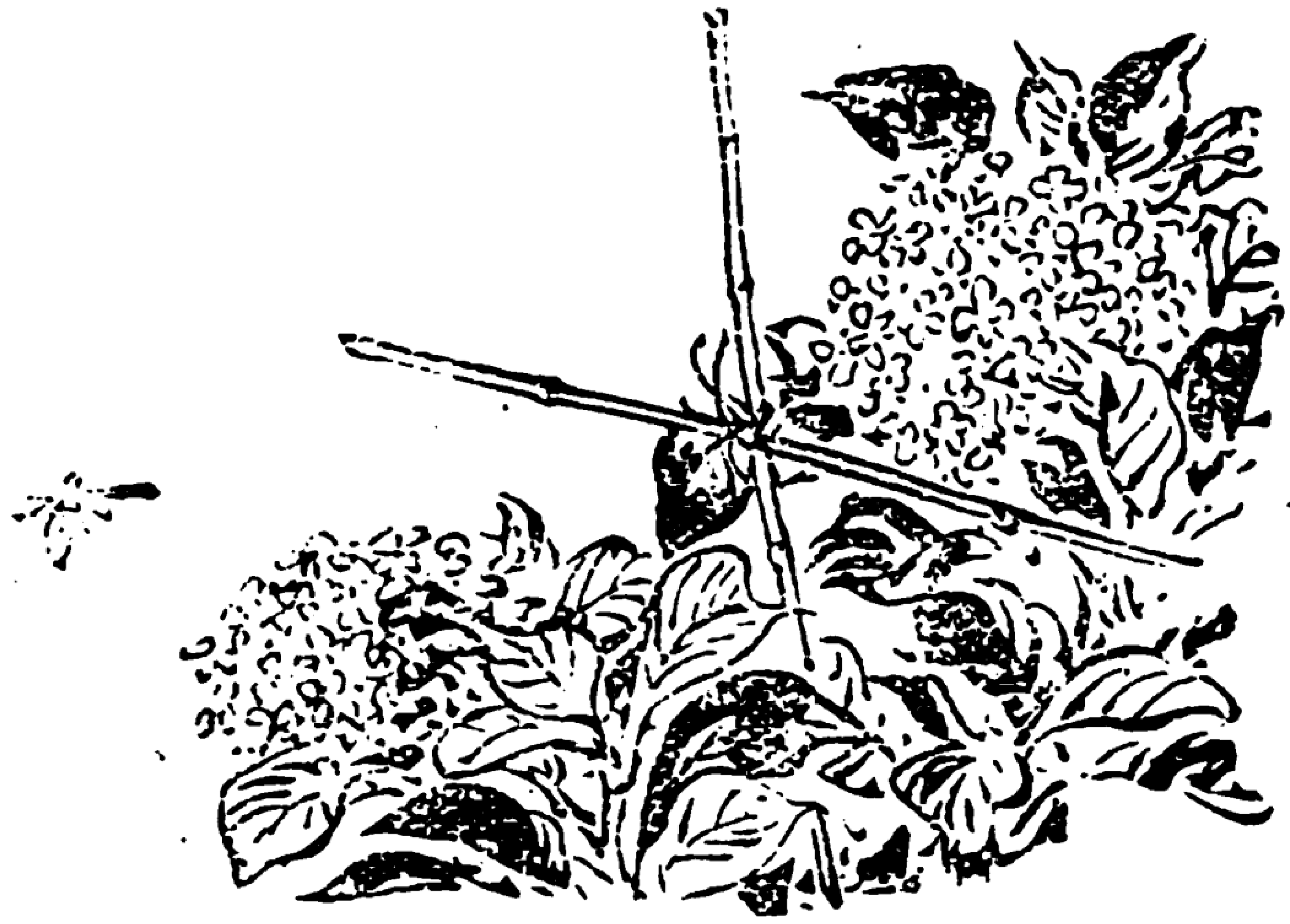
午前八時イワラニ號は恙無くカラウパパ村の沖に錨を下し、やがてカノー（獨木舟）に似たる端艇に乘りて岸に向ふに、波瀾高く岩礁聳え、高く低く搖られてはさながら木葉に似たる舟危うげなるを、馴れし舟子は巧に楫を操りつゝ岩と岩との峽を潛り程なく陸に着きぬ。

數多の人はわれ等の一行を迎へたるが、余は一目見てその異形なるに驚けり、人としは思はるれども鬼の如き容貌なればなり。

鼻の落ちたるものあり、頤無きものあり、耳なきもの、

唇の半ば腐りたるもの、額に大なる穴あるもの、顔の肉さながら爛れ熟したる李の如く腫れふくだみたるもの、相携さへて列び立てり、カナカ人種の事とて色黒きはその特質ながら病のために一層の黒色に紫色の斑點を生じたる顔容、凄しともあさましとも恐ろしともいふべき言なきまでに、見るものをして慄然として戰かしむ、かれ等は一年唯一回ホノルヽ府より來る音信を聞かむと望む情の切なるより、我等一行の上陸を歡迎し、欣喜の色動きてうち笑へり、されどかゝる凄き容貌にて笑を添へたるはなほさらに凄味を加へて、我等をばこの世とも覺えぬまでに戰慄へしめたるこそ慘ましけれ。

一行の先導なる衛生局長スミス氏は我等を此村の倶樂部に案内して朝餐を供し、さて先づビショップ、ホームに嚮導せんとて、閾に似たる柴草を踏みわけて先にたてば、一行二十餘人其後に從ひゆきぬ。


なめて見よ名もあぢさゐの花の露

遠からぬ彼方の山にはクヽイ樹の翠滴らむばかり美しく、蘚苔茂れるアルゼローバ樹の下に、玉より清き泉淙々として流るゝあり、そと吹く風に名も知らぬ花卉の種々の芳はしき香に送り迎へられ、爪さきあがりの坂路登りゆくと數町にしてペンキ塗りの折戸ありて、ホームの門に達したり。

ビショップ、ホームとは甞に布哇ホノルヽ府に住したる有名なる富豪家シー、アール、ビショップが此癩病島に生れたる童女の教育をなさむために設けたる宗教學校なり、病室、

寄宿舍、致塲、浴室其他合計二十六棟あり、廣大なる柴生の廣庭あり。

門を入りて廣庭に出で數歩を進みゆく程に、黒衣白面の二婦人、裳裾も輕く裊々と歩み來り、スミス氏を見て、

「まあお早く、よくお尋ね下さいました。」

と一人が言へば他の一人は殊に愛嬌溢るゝばかり

「子供等も貴下の御出でを待ち兼ねて居ります、今日は此島の臨時の祝祭日では御座いますし。

余はまことに意外の感ありしなり、癩病島として千百十一人の天刑者と年老いたる醫師一名と、馬追ふ黒奴の二名の外、山の此方に一人の健全なる人も無きこの憐れむべく慘ましく寥しき太平洋の孤島に於て、かゝる明眸皓齒妙齡の婦人の住まむとは、余が豫想せざりし所なり。

スミス氏は余を顧みて、

「これは宣教師チョーンス孃御姉妹です、」

と紹介し、そは妙齡の身にて進んでこの癩病島に來り神の福音を傳へつゝ既や三年を經しよを語りぬ。孃は初對面の挨拶をなし、余が日本の人にして遥々布哇に來り殊にこのモロカイ島に來りくれしをその光榮なりと喜ぶよしを語れば、妹はまた、その神の旨に從うて波路はるけく此島に渡りあはれなる童男童女を監督し不幸の運命を慰め居ると、その子供等を觀むとなと語りたり、やがて先に立ちて東道するに從ひ行きて、廣庭を過ぎて講堂に導かれぬ。さほどに宏壯なる建築にはあらねど、清く新しきとりしまりたる木造の堂なり。クリストの聖像の下に怪しき容貌の女兒の一隊、盛やかに衣をたゞし列をなして立ちたり、一行中の樂師ベーガアといへる獨逸人樂を奏し、女兒等は一齊に我等を歡迎の歌を唱ふ。

あはれ花ならばまさに莟の色の美しかるべきものゝ、

鼻落ちたる頬の傷れたる目口耳の肉の半ば頽れたるが、十五六歳より七八歳に至るまで凡そ五十餘名、一の講堂の中に列びて一種いふべからざる音調を發せるなり、我等は天下またかゝる悲慘の光景はあらじと思ひぬ、彼のチョーンス孃姉妹は熱心にこの歌を傾聽きて、微笑の波を双の頬に堪へたり、孃等はこのあはれに醜くき女兒等をわが子の如く愛するが故に、その日頃練習したる歌を聞きてはこを人に誇らむとするの情に堪へざるに似たり、我等歡迎の歌聞き了りて、

「實に感心の外はありません、御丹精の程お察し申します」

と言へば、

「いゝえ、まだ發達をしませんからよく揃ふやうにはまいりませんが、中には上手に歌ふのもあります」

妹なる孃もまたそれにつきて嬉しげに語りぬ。

敎場、寄宿舍、浴場等を見了りて後姉なる孃は、これよりダミエン氏の墓へ案內すべしと導きぬ。ホームの裏門より出でゝ美しき花と青き草の原の間を縫へる一條の徑路を進み、蒼々として日光を支へたるアルゼローバ樹の下を潛りぬけたる處に一の石碑あり、これぞ有名なる献身者ダミエン氏の長へに眠れる處なり、八寸方形にして高三尺ばかりの花崗石、その表面には彼の偉業につきての賛辭を刻めり、墓の周圍には鐵柵を繞らし、花卉咲き亂れたるに、墓木なるらん名も知らぬ常綠樹の鬱蒼として墓を蔽へり。

スミス氏はダミエン氏の履歴を語りぬ、ダミエン氏は千八百四十一年一月三日にベルジヤム國（白耳義）ローレン府に生れ、千八百六十三年齡二十二の際布哇のホノルヽ府に來り十年間宣敎せるが、此癩病島の事を聞きて深く感じ、千八百七十三年より此モロカイ島に渡りて天刑病者の尊敬すべき親友となり、島に居ると十一年目に癩病に感染し、五年の間病に惱まされ遂に

病死したるなり。

余はどの尊敬すべき偉大なる人物の事業を思ひて一種の感に打たれければ、

「是は人生の最も深厚なる最も高尚なる事業を成功した一大偉人といふべきであります。

と言ふや、姉なる孃は最も熱誠なる面地にて、ダミエン氏は實にその理想の人なることを言ひ、妹はまたダミエン氏が癩病に罹りてやがては死に臨む遠からざる際に、孃等の父が相見し折の事を語りぬ、孃の父がダミエン氏に今此病に罹りて如何なる心地するやと問ひし時、ダミエン氏は微笑みて、是れにて始めて私の事業が成功したりと思ふと答へしとなむ。

余は始終の物語を聞き狀態を見たり、ダミエン氏はまことに偉丈夫なり、されどチョーンス孃姉妹がその妙齡の身にて心を浮世の欲に絕ち、身を墨染の衣にやつし、ダミエンをもておのれの理想となし、自から奮つてダミエンの後を繼がむとするの志に至りては、さらに深く人心を動かすものならずや。かゝる行爲は古往今來天地あらむ限り、人類の存せむ間、最も高尚に最も純潔に最も偉大なるものに非ずや。

孃等姉妹にして若し世に志あり其美しき容顏に匂ゆかしき粉黛の粧して交際場裡に出でむとせば、一世を風靡して時めく花の人とならむは難きにあらじ、さるを孃等はかゝる卑き小さき志望にてはあらずこの寂寥なる孤島に種族異なるカナカ土人の癩病患者千百十一人を友となし、百五十人の同じ疾める童女を子の如くなし、一年唯一回の外はホノルヽ府までの通信さへなし難き境遇に安んじ些少の不平もなく怨嗟もあらず、靜に神の福音を說き、功名利達富貴榮華を望む心にかへてあはれなる童女等の母たるを愉み、その癩病の感染するを厭はぬのみか、却てそをダミエンの如くおのれの事業の一大成功と信じ、花の一生涯を絕海孤島の中

に送らむとするを見ては、あゝこれ神か、仙か、天女か、我日本二千餘萬の姉妹中、容貌態度の孃等姉妹に敵すべく或はそれにも優れるものは多からむ、されどこの志を有するものに至ては恐らくは一人だにあらざるべし、否、恐らくは孃等のこの志を解し得る者だに有りやなしや覺束無くは思ふなり。

余はヂョーンス孃姉妹に相見て、初はその容顔の優に美しきと態度の楚々として言ひ難き風情の人を惹くものあるを愛したれども、今やその志の高尙く、その行の俊て純潔なるを見て、内に顧みつゝ、わが心の極めて低くわが身の極めて汚がれたるを感ずると共に孃等に對して覺えずも敬虔の念深く余が最後の握手の際は、實に殆んど神の御手を戴くの感ありしなり。

ダミエンの墓の邊に逍遙すると少時にてホームを辭し、門を出づれば數十頭の馬は準備せられつゝ、一行はこれに乘りてさらにカラワオのあはれなる患者を訪れたりき。

余は今もなほこの神の如き、崇高なる黑衣婦人の風采と、人生の悲しき限の聲をあつめ慘ましき限の姿をあつめたる彼の童女等の容貌と歌とを、遙かなる波路の外の孤島の彼方に懷ひ起す。

ジョーシ、ミューラー

（孤兒院の創立者）　櫻川生

（一）

智識の進歩、敎育の普及、器械の發明、殖産工業の發達、富の増加せる十九世紀に生れたる人々の幸福は百年或は百五十年以前に住みたりし人々の夢想にだも及ばざる所にして滊船、鐵道、電信、電話、郵便、新聞等其他の利便を擅にしうる我等の幸福は寔に大にして何人も文明の有り難きを感謝せざるものはなかるべしと思ふ、若し百年以前に墳墓の中に葬られて今日冷

かに地中に安眠しをるものを拉れ出して倫敦の如き、巴里の如き花の都を見物せしめば其人々は必らず天國は此る町をやいふ、極樂とは定めしかゝる都の謂ひなるべしと驚喜するとならん、併し石や煉瓦を以て疊みたる大厦高樓の裏には廣き世界に枕する所なきものも尠なからず、綺羅錦繡を着飾りて浮世の風を知らぬものもあれど、亦た皮膚を刺す嚴寒に纏ふ衣なくして慄ふものもあり、山海の珍味に皷腹するものもあれど、終日額に汗して日常のパンを得られぬものもありて極樂の後には地獄の相隣れるを見るなるべし、憐れむべきものは是れのみにはあらで、老いて助なきものあり、病んで醫藥をうるに術なきものあり、此れ等のもの素より憐むべきものなりと雖も未だ玉の如き少年、花の少女が幼にして兩親なく、助け人なきに若かざるべし、而して殆んど無垢無罪の少年が教育を受くるを得ず、家を得るをえず、遂に滔々相率ゐて無賴漢と化し社會に害毒を流すに至つては恐らく此れ等の如き者程憐れむべきものはあらざるべし、かく憐むべきものあるにも拘はらず滔々たる社會の人々は見ぬ振りをして彼等を見殺にし、取るとを知つて與ふるとを知らず、集むるとを知つて散ずるとを知らず、受くるとを知つて授くるとを知らず中には强欲飽くとを知らず他人の膏血を絞つて自らの肚を肥さんとするものあるに至つては曩に文明を讚美したる舌を以て文明なるものを詛ふものあるやも知る可らず、世は情の露なき沙漠も同然にして誠に恐るべき修羅場の如くに思はる、偶〻仁人君子ありてかゝる憐むべきものを救はんと思ふものあれば是を救ふに術なく、巨萬の富を積んで此れ等のものを救ふ術を持てるものはかゝる慈善の心なし嘆息の至りなりといはざる可らず、而してかゝる現金的なる世界に大慈善家ヂヨーヂ、ミユラーの如きもの丶起りしとは猶ほサハラ沙漠に沃地を見出したる如く沙漠の

如き世界に住める人々が彼の惠の露に浴して力を得、希望を得たるとの多きはいふ迄もなきとなり、ミユラーの如きは誠に十九世紀の天地に慈善の福音を宣傳せんが爲めに遣はされたる使徒なりといふべし。

（二）

ジョージ、ミユーラーの一生—一千八百五年九月廿七日に生れ一千八百九十八年三月十日沒す—は不思議なる歴史なり、其不思議なりといふはミユーラーが少年時代をば盜兒として過ごし、青年時代をば放蕩無頼漢として過ごし、壯年には一變して說敎師となり遂には孤兒院の設立者、孤兒の父、慈善家の泰斗と仰がれたるのみにはあらで、不思議なるはミユーラーの事業なり、ミユーラーは貧しき人なりき而して其一生中に數千萬人の孤兒を養ひたりき、ミユーラーは少しも已れの事業を廣告せずして數百萬の金を得是を孤兒の爲めに費したりき、而して其數百萬金は殆んどミユーラーに一面識のなきものより寄贈せられたるものなりき更らに驚くべきは孤兒院には些細の貯蓄金もなくして數千の孤兒の飢えしを聞かず、如何なる困厄の境に陷るも一錢の金も他人より負債せしとなし、而して最も不思議とするはミユーラーが數百萬金を得たる方法なり、何如にして得たる、ミユーラー自ら曰はく余は啻だ上帝に祈禱せしとによりて是を得たりと。我等はミユーラーを知り其事業を知らんが爲めに其一生を略記すべき也。

（未完）

家庭の實業

其村

（三）麻裏のうら

手工の術が進むにつれて、世の捨たるものも亦用ひられ、所謂廢物利用といふことの、盛んに行はれ行くことこそ、誠に喜ばしき事柄なりけれ、先き々々より號を追ふて、我が語り來りしところ、内職の種類其樣

々の一つとして、玆にいはんとするところは、即ちこれ、この廢物利用の一つなりけり。

讀みたまふ人々は皆知りたまはん、あさらけき料理の料に用ふるなる、彼の茗荷といふものを、必らずやよく知り玉はん。

其始めまだ、軸の和かき中にとりては、所謂茗荷筍とて、香よきまゝにいたく賞され、様々の膳に上ぼるといへども、日長けのび〳〵てかたくなれば、更らに又用ふる道なく、定まりの季節終へては、道ばたの草同様、鋭き鎌に苅り倒ほされて徒らに枯れ果てしところなりしを、誰がこれを然か思ひ立ちけん、うまくも利用されて、一つは幾分の收目を増し、然して又、其利用の事のためによりて、玆に又、内職手工の一種を増し、人々に應分の仕事を與たへ、頓かて何某の賃錢を給しぬること、抑も記すべきことにぞある。

扨其廢物、古き茗荷筍の捨たりしものが、如何なること、如何なる途に利用さるゝやといふに、そは他にあらず、御互ひに日々はいて行く、草履の裏に造らるなり。

彼の世に有ふれの一枚草履、所謂麻裏といふものは、其名の如くに麻を以て裏となせしを、段々と物の價増につれて、充分に此麻を用うること能はざるまゝ、或ものは、美しき藁すべを用ひ、又或ものは、沼川に生ひ繁れる、蒲の一種をさへも用ふるが、其中に就いて、尤も數多ほく用らるゝは、即ち玆にいふ、この茗荷筍の枯れたるものなり。

其用法、漸々秋風のふき初めて、百草其色黄ばむ頃ほひ、各々は丈長きこの茗荷筍をすべて苅り取り、大ひなる束になして、其處彼處の小川又は池などの中に浸す、されば日數經るまゝにすべてふやけて、遂ひに皆腐さり果つるなり、さる日を待ちて、これを流れにて洗ふ時には、其和かき部分即ち腐りたるものゝみは、

悉とく洗ひ去られて、其線緯なるもの丶み殘り、誠とにシナヤカにして而かも美しきものとはなるなり、そを尙數日水に晒らして色を清め、然る後これを日にあて丶乾す、少なくも二日三日、よく日に當て丶干し上ぐるなり。

然してよく乾き上りたる處、それ〳〵に別けられて、手內職する人の許に送らる、其方法、束の大小及び其數によつて送らる丶あり、或は目方によつて送らるあり、二樣にして一つならず。

斯くの如くにして、其手許にこれを請取れる人々は、例の卷煙草まく家の如く、又は燐寸の小箱張る時の順の如くに、一々手別けして其ことに取かゝるなり、まづこれをそろへるもの、少しつ丶束にするもの、或るは屑を取るものなど、樣々の手數それ〳〵に終へたる上は、いよ〳〵最終の仕上げなり、たとへば藁帽子の眞田あむ如くに、三つ合せのアシカハといふものに編み上ぐるなり、誠とに容易なること、譯もなき仕事の樣に見ゆるといへども、よくも手馴れざる間は、兎角右にそれ左にふれて、其幅を一つに揃へて行くこと一寸六ヶ敷く、殊とに其分量を同じくして行くこと、中々たやすからざる由、もし其分量、其用ひの量が、多少一つに揃はざれば、其もの丶不恰好なるのみならず、誠とに弱くして、切れ安きに値段も安きとて、麻裏屋にての取引よからざるま丶、定めの內職賃をも拂ざるとぞ、さればこれにも亦、それ相應、應分の手馴らしをして掛るなり。

應分の手馴さへあれば、これ等をこそ、數多き內職中の、尤も輕便なるもの、至極簡易なるものといふべきなるべし、たとへば煙草卷く管の如き、或は小箱張る刷毛の如き、小道具は一つも入らず唯僅かに手鋏の小さなもの、そ丶げたる髯切るための一挺あれば、他はすべて徒手にて足る、さるかはり、芥たちて、割合

にむさくろしきことは、到底かの、小箱張りなどに比すべくもあらず、況んや巻煙草まきに比してをや、又彼の綳帶くづしに比してをや。

賃錢の拂ひ方、其初め目方にて請取りしものは目方によりて算し、又其量によりて渡されたるものは、出來上りたる長き眞田の丈によつて、算せらる、大抵が一日にして、六七錢、乃至十二錢までは手にすべしといふ、東京市外、彼の早稲田附近といひ、又は谷中の最寄りといひ、其他日暮里など、茗荷を以て聞えたる所などは、到る處、何れの家も、内職としいへば、唯このことのみを頻りにかせけり。

社會

流行案内

有松絞(浴衣地の一)

愛知産の有松絞は浴衣地として汗はじきよく着心地のよきため流行衰へず、模樣紋柄、年々進歩する有樣なり、今年の流行向は、

青柳絞、碁盤、千筋、二度二本標、切散飛白、嵐絞の類、男子向の高尚なる柄にては、代價八九十錢位より一圓四五十錢迄。

派手好きまたは青年向の大柄物には、白影、唐松、やまと錦、竪玉影絞など五六十錢より一圓三四十錢迄。

婦人向　の高尚なるは白三浦、はごろも、やまさくら、替り嵐の類にて八九十錢より一圓五六十錢迄。

紺絞り物　にては霰壓屛子、錦大名など一圓より二圓位。

令嬢向　には吹入、模樣入を第一として白影、大和錦、筋物など派手柄七八十錢より一圓二三十錢まで。

紺絞　は大市松、大白抜、三浦地類一圓四五十錢より參圓位。

二度二本標、錦大名　の二種は尾張町新地のみなもと屋が新工風に成

り、特別に、織り出したろ今年始めての珍柄にて大に喝采を得しものなりと。

夏の敷物

油團、籐むしろ、和洋折衷寒暑兼帶二様の用向にまに合ふ由たか織、麻段通、其他アンペラ、花筵は手輕にてまた需要多し。

代價は花筵一畳にて三十錢より一圓まで、アンペラ四五十錢より一圓三四十錢、由多加織一圓十錢より一圓三十五錢、麻段通一圓六十錢より三圓五十錢、籐むしろ一圓十五錢より三圓位ひ、油團三十錢より六七圓までを普通の相場として品質、色合によりて高低あり。

夏の建具

葭障子枝は成べく細きを佳とし骨は杉柾の木目廿筋以上なるを洗ひ出しにして糸は太白のモヂリ編み二間四半にて十五六圓より二十圓位迄。同葭ながら少し太くなりて柾目も十筋以下に糸も麻にて編めば十一圓より十五六圓。簾　も太白のモヂリ編にて杉柾の骨に少々の贅澤を云はヾ十一圓より十三四圓。麻編にてもモヂリなるは八圓五十錢より下へは七圓どまり、一本編二本編などならば五圓五十錢位ひより四圓もあり三圓位のものあり。つひたて　の高さ三尺五寸幅四尺位ひの物にても葭の上等ならば五圓に近く、簾にても四圓は取る可し。竹簾　の一分割最上等にて一間四方八九十錢下等にて四五十錢。簾簾一枚(三尺幅に丈六尺)上は六七十錢より下は二十錢位まで。總じて昨年に較べて手間賃原料などの引上りたる爲め大凡一割より一割半方の騰貴なるよし。

布哇日本人の小學校

在布哇の日本人が設立せる日本人小學校は明治二十九年四月の創立にして三萬に近き邦人の子弟に日本の教育を施しつゝあるなり、今日本人教會發行の教報によりて其狀況を記さんに同校は本年四月十二日を以て修學證書授與式を擧げ

來賓には島村公使新國公使館書記及正金銀行出張所長を始め諸會社員醫師紳商生徒父兄等有志者凡そ五十餘名　午後三時教師桑原秀雄氏立て開會の辭を述べ　勅語を奉讀す　生徒一同君か代を唱へ　各級優等者　岩本ふよ　脇田きよ　森垂ゆら作文を朗讀し終りて　校主奥村多喜衛氏　來賓への挨拶生徒への告辭を述べて曰く

本校設立滿二年期に當り、玆に修業證授與式を擧ぐ、島村公使閣下を始め有志諸君の來臨を忝ふす、誠に本校の光榮感謝の至に堪へず、顧みて二年前に於ける在留同胞子弟の情態を思へ、其談話には英語布語或は葡語を混用し、正しく日本語を話す能はず、文字に至てはいろはさへも讀書し得るもの殆んど稀に、人に逢ふも禮をなさず、博遊の風、日本人にして日本人と思はれざる程なりし、然るに二年後の今日彼等は正しく日本語を使ひ、已に本字交りに其思想を文に綴るに至り、彼等又禮節に習ふ、是れ非常なる變化と云はざるべからず、余は本校の成蹟を思ふと共に、寄付者諸君の厚意桑原教師の功勞生徒の勉勵に對し滿腔の感謝を呈す。

抑も在外國同胞子弟日本的教育の切要なるは吾も人も夙に之を知る余が當地に來り第一に感せし所亦實に玆に在りき、爾來小學校設立の事を考へ、明治二十八年三月頃當時の領事濟水氏に談し、或は有志の間に奔走し、幾たびも企つる所ありしが不幸にして成らず余は自ら顧みて熱誠の足らざるを嘆したり、其歲の暮桑原秀雄氏友人の書を携へ余に來り且教師として數年の經驗あるを語る、當時余は氏を以て天の賜と心窃かに喜びたり、踰へて廿九年三月友人に勵まされ同胞子弟に對する我責務と云ふ一念に驅られ愈小學校創立の决心をなし、桑原氏を招き余か年來の希望を告げ且つ資金なければ余が當分は余が食を分ち、僅に小使を與ふるのみにて教導の任に當らんことを乞ひしに氏は喜て之を諾せり、嗚呼此一諾余に取ては千金の資に優れり、依て玆に凡の困難を排して明治二十九年四月十三日「クイーンエンマホール」の一室内に本校を開始せり。

初は定期寄付として與へられし圓額僅に六弗五十仙に過ぎざりしが日に月に有志者の同情を得又教授上の事も大に整頓し已に今日迄名簿に入りし生徒七十名の多きに達し消費せし金額七百六十七弗八十仙にして皆有志者の寄付に成る然れとも是未だ滿足すべきにあらず明年四月より高等科を置くの必要あり且又各島に散在せる學齡兒童の數四百に近し、さらば父兄及有志諸君益不肖等の微志を賛せられ本校を完成し同胞をして普く教育の恩化に浴せしめんと切望の至に堪へず

生徒諸子よ、卿等は已に有志諸君の厚志を領す、何を以て之に答へんとするものぞ、一々回禮すべき乎、千百叩頭謝辭有志諸君の喜ぶ所に非ず、唯卿等勉めて怠らず、能く日本語を讀み書きするを得は冀くは其厚意に副はん、否未だ以て足れりとすべからず、啻に日本文字を知るのみならず、所謂日本魂を養成し、此人種共進會とも云ふべき布哇の天地に眞に日本人を代表するに足るものとならんと、實に卿等が有志諸君に答ふるの途なるぞ諸子勉めよ。

生徒總代松尾一郎は答辭を朗讀し次て奥村校主は修業證及賞品を授與す

第一學年を終へしもの八名、第二學年十一名第三學年十一名　賞品を得し者は

學業優等一等賞　森重ゆら脇田きゆ小谷倉市、　仝二等賞　松尾一郎竹屋まさこ上村丈治廣本くめ岩本ふよ吉岡まつ　仝三等賞　入江一山城榮一、

精勤證第一等（一年間無欠席）奥村梅太郎　仝二賞（欠席三日以内）濱本精一　奥村春樹、　仝三等賞　脇田きよ、廣本くめ、中島秀雄石川たけ、村上豐。

島村公使正金銀行出張所長戸澤鼎氏の演説あり此式を閉ぢたりき。如何にわが邦人の子弟兒女が彼の地に在てその父母その教師と教育せられつゝあるかを想ひ見るべきなり

貞婦平井いし女

いし女は府下麻布本村町百七十八番地平井伊兵衛（六十）の妻なり。元向島請地村武井久八の次女にて三十二年前十六歳にて伊兵衛に嫁せり、伊兵衛は同村の豪農平井慶悦の長男にて明治六年の春より公の命を蒙りて琉球に小笠原に赴き勧業に務めしが事業の齟齬に失敗し、それより不幸打つゞき零落の身の果敢なき生活なせるうち、終に世に疎まるゝ癩病にかゝり肉頽れ膿流れて臭氣たえ難き難治の身とはなりぬ、さるを阿いしはこの間にありて少しも厭ふとなく看護と生計とに心を砕き思を盡し、七年以來三田なる工場に通ひ一日僅に十錢位の賃錢を得、それにて藥を買ひ米を買ひさては夫の嗜めるものさへ調へ毎日羅宇を販りて辛くもその日を送れる境界、その行爲の正義にかなひ人情に切なることに貞婦の龜鑑といふべし。爰に淺草に書畫館といふあり、世にかくれたる善行あるものゝ肖像を畫きて館内に陳列し弘く美事善行の表彰に盡し衆益に供せんとの目的なるがこのことを聞きてやがて館員をその家に訪はせける、今館員小林某の訪問記を中央新聞に寄せたるものを摘録していし女の善行が如何なるかを視さん。

（前略）本日の貴社新聞に[illegible]貞婦平井いし女の事蹟[illegible]得んが爲め[illegible]實に[illegible]（中略）[illegible]貴紙上[illegible]實に今の世に稀有の婦人と存候（中略）[illegible]

上某氏父娘の篤實に御座候小生訪問候節は折惡くいし女は不在にて跡は見る影もなきまでに病み果てゝ殆んど不具者同然なる夫伊兵衛返辭さへもなしかね候樣子に詮方なく暫時戸外に佇立いたし居候處隣家なる矢上某氏の娘出で來りて小生を自宅に招き入れ候上其訪問の要旨を聞かれたしとの事に付き委細申述べ候處非常の歡びを以て直ちに之を其父に告げ共に涙を流して小生を迎接し恰も自己の事にてもあるかの如きまでに打喜ばれ候尤も同氏も貧困なる生活をいたし居る樣に見受けられ候が其赤誠には小生ほと〱感入候夫より娘はいし女を迎ひに行くべしとてさしもの大雨を厭はず所々尋ね廻はり二時間餘りを經て同道歸宅いたされ候此日いし女は幸ひに工場の休日とて數年來芝の某神社に病夫の快癒を祈る爲め日々鹽斷ちして祈願を籠め居る事とて此日も參詣の歸途夫が好物なる永坂町なる更科蕎麥を自分の食糧を減じ其錢にて少しばかり買ひ求め夫より歸宅せんとする途中迎ひに出でたりし隣家の娘に行逢ひしとの事に御座候察するに矢上氏父娘も貞婦の心を察し己れが不充分なる中よりも常々補助を與へ居らるゝやに見受け申候德孤ならず必ず隣ありとは係る事にもやと小生は坐ろに感涙とゞめあへざりきと云々

至誠人を感ぜしむ、この善行はやがて區長及彰善會の手より知事に達し、いし女は東京府廳より德行顯著の褒状と金圓との賜與あり、且つ此月の十日を以て麻布南山學校に德行表彰會を開き、篤くいし女を慰め金品を授與　坂正臣氏、「麻布貞婦曲」を作り西幸吉氏之を薩摩琵琶に演奏せりと、近來賞嘆すべき美事といふべし。

◎彰善會　は高崎正風男爵を會長とし二條公、近衛公、黒田侯、勝伯、品川子外諸縉紳を始めとして會員數百名より成り、世の忠孝大節は勿論順孫悌弟貞婦義僕公益慈善等主として現在の善行者を表彰し社會の耳目に觸れしめ、自然に社會の制裁力を復興せんとの目的なる由、前項いし女の彰善會の如きこの會の擧に成れるものなり、かゝる事は共に喜の音信といふべきなり。

◎在外密賣淫婦取締法制定の請願　矢島楫子女史外千數百名の連署にて議院に在外密賣淫婦取締法制定の事を請願せしが、貴族院はこれを容れて委員に托し會議に附せり。密賣淫婦の海外到る處に跋扈するは具に嘆かはしき限にて邦人女子の面目を損するもの今さら

いふまでも無し、議院の決によりて政府は然るべき取締方法を定むるなるべし

◎東海訓盲院　博愛慈善の主旨より盲人教育を施す目的にて静岡縣遠江國小笠郡掛川町に東海訓盲院なるもの設立せらる、會員組織にして寄附金品の補助をも受く、今回創立一周年に際し廣く慈愛なる社會公衆の賛同入會を望むといふ、社會的事業として道德上の義として眞に勸奬すべき擧なり、敎科は尋常科技藝科の二種に分ち尋常科は國語算數修身講話體操を授け技藝科は音樂及鍼按術を敎ゆ、靜岡縣下にては唯一の社會的慈善事業なり。

◎臺灣の女子　二名來京して明治女學校に入學すこの二女の學び得たる所のものは臺灣女子社會に將來多少の効果を與ふるならむ。

寄書

海苔まき

鹽谷華園

杜鵑血に啼く、卯月の某夜の、東天紅を潮するの頃、予等兄妹が、靈魂既に昇天せし、冷たき母の、亡軀を圍みて、悲泣せしも、想起せは、既や三歳の昔となつた。

賴山陽が、自ら其像に書して、『此脚侍母輿、二踏ニ芳山』といふのを讀んで、其以前は左程氣に留めなかつたが、今之に擬はんとしても出來ぬ、孤兒の身となつては、只モー泣く外致方がない。

予が飄然笈を負て、東都に入り、始めて上野に吾妻の花を觀た時に、賴山陽が母輿に侍して芳野に觀櫻せし古の樣を腦裡に畵いていた、すると笑ふ聲さゝめき

て何校かの中學生と、其妹らしきとが、老母の手をとりて、登て來るのを見て、如何にも〳〵羨しくて、其後に隨行して、上野中を歩た事が有つた、予は母を亡くしてから、親ある人が羨しくてならぬ樣になつた。岐阜の中學は、自宅から僅に一里半であるのに、予は學校の課目外に、漢文が研究したひといふ野心と、今一つは性來の朝寐坊の予は、鳥と共に宿を飛出して、通學するのが困難なので、漢文の教師で、伊奈先生といふ老儒の膝下に止宿して學で居た。其頃或る一流の生徒間で、『お飛脚』と云へば『ウムアノ鹽谷』と、この樣に通りものになつて居た。

それは予が土曜日の午前に課業が終ると、予の自宅の隣りの叔父の長男で、其頃足まめにも通學して居た從兄と共に自宅に行き、一泊して、日曜日の日暮れに漢學先生の方へ歸るのが例であつたその往來が繁々なので、口の惡ひ滑稽家が密につけた異名が、今は廣く朋友間に傳つて、『お飛脚』といへば、予の事となつてしまつた。予は今裸躰的に白狀すれば、敢て『父母を慰る』『父母の安否を問ふ』といふやうな孝子の精神で歸宅した譯でなく、只母は『今度の土曜日にも必ずお出でよ』と云はるゝのと若し行かぬと云ふ時は、例の從兄が『お母さんがさぞ落膽するだろう』と云はるゝのと老儒先生に『父母を安ずるは孝の始なり』など嚴格に教訓さるゝのと、老儒の夫人が『後にも先にも男の子といへば貴君お一人だものお母さんが待てらしやるも無理はない、お歸りよお歸りよ』と斯く皆から歸去を說かるゝので、『まあよそう』と思て居たのも、つい歸宅する精神になるのが例であつた。

予は海苔卷が大の好物で、予が歸宅した土曜日の夜ヲンプを圍んで、父母と予とそれに五人の妹とが——時には隣りの叔父か叔母或は從兄も——團欒して茶を煮て、嘗て本誌百拾四號に蘇峯先生がお書きになつた、

樣な、家庭的茶話會を開くのが習であつた、其時に菓子の外に海苔卷が現るゝのが例の樣になつて居た。時には父が何時の間に出來したかと不思議かると母は何とも言はず、年長の妹は母の顏をながめて微笑むことが有る。あゝ不注意なる予は知らなかつた、其場合の母の無言と妹の微笑の下にひそめる愛の秘密をば。母の亡軀と北邙一片荼毘の煙と消へ失せて、予と妹とは世の慰樂の過半を天に捧げ、殘るは袖に乾かぬ涙痕のみといふ世にあじきなき孤兒となり、或る夜亡き母の音容を語り出たる節、予は妹よりはからず。海苔卷の秘密を聞た、滑稽な叔父さんが土曜日度に『今日はお母さんが海苔卷をこさへてるだろう岐阜から大將が歸るから』なぞと笑はれ、無心な當時五ツの末の妹さへお母さん『今日は兄さんが歸るから海苔卷をこさへるので私にも頂戴な！』父が母の餘りに御馳走さはぎをするのを見兼ねて『お前は物を食せるが子を愛するのだと心得てるんだろう!!』と時には小言が出るので母もきまりが惡ひので、ソット飯櫃と海苔箱とを、裏の四疊半一人知れず運んで、海苔卷を造り、茶話會てふ意に出さるゝのであつた。彼樣な折りには父の不思議かるのも母の無言も此間の秘密を知る妹の微笑も、それ故と聞た時、予は其言ふへからざる亡母の慈愛に泣た。拾錢銀貨をほり出して下女を走らせ下宿屋で食ふ菓子同樣に、むしや〳〵ぞ食べた時の事を考へれば能くも此口が曲らなかつたと思はるゝ。

今や何校も夏期休課が近かづひた、で皆さんは歸省になるであろう、其節能く心して視たまへ、父上や母上の己に對する一擧一動が洩らす愛の秘密を。くれ〳〵も孝養を忘れず、予の樣に母輿に侍せし山陽を羨み、風樹を嘆ずる不孝の身となり給ふな！本誌の愛讀者たる皆樣！

首夏月　　石川柳子

むら雨にぬれし若葉の露見えて
月の光も夏めきにけり。

見聞錄（地方俗風）

信濃　翠陰生

攝津有馬郡生瀬村といへる處には、五人乃至拾人宛の組合あり其組合中に死者あるときは互に打ち寄り死者を棺に收むる事より、火葬に附する事まで、取扱ひ居れり、其組合には死者の親族たるものもあれど又赤の他人も加はらずされど、死者の取扱ひ濟みたる後各家に歸りて死者の狀態を批評しつゝ或は悲むものあり或は嘲けるものあり此等の風習は死者の爲め一掬の涙なきを得ず

又同村にては花嫁を迎へたる時、披露の爲め村内の婦女子を招きて饗應す、其村其花嫁の持ち來りたる荷物を披きて、一覽せしむるを例とす、其婦女子共之れを一覽するときは、皆異口同音に美麗なり當世向きなりと賞むれども、各家に歸りて後は又彼是れ品評し、其花嫁の實家の貧賤貧富に及ぶなり。

又此地方は遠く六甲山腹より流れ來る溪流を引きて飲用水となせり、此水中に含有せるものゝ化學的作用にや日常これを飲用する老幼男女の齒概ね茶褐色となり居れり、されど一見窈窕たる美人も一たび笑ふを見れば玉に疵の感なくんばあらず。

手鞠歌一斑（但馬地方）

翠陰生

（一）寺の緣から疊紙拾ふて何物じやと思ふて拾ふて見れば苧うの習へ機をり習へ裾の袘を縫ひ習へ〳〵

（二）私の隣の長太郎さんは馬に乘るとて馬から落ちて竹の切屑で足の裏つひて、痛たや悲しやヽれ婆さんな醫者に見せうか眼醫に見せうか醫者も眼醫者も御無用で御座候、あの山越へてあちら片なる小石を拾ひ、紙に包みて袂に入れて、袂裙からお湍に與れはお湍心に金かと思ひ、金じやないはい碁石で御座る、何に爲よか考へながら、私の隣の流川（筏の名）、流せ、川に流せば苧屑を止める、打ちて紡いて七つに入れて、七つ半に糸傻切れて、京で晒して大坂で染めて、此處に流行らぬ牡丹をつけて、姉に着せうか、妹に着せうか、姉にや短し妹にや長し、せめて旦那の「夏羽織り」〳〵。

附記　内川久雄外数氏の寄稿あるも編輯上の都合により次號に收むべし

時計價格概表

金側

●十八金無双裏三枚蓋廿一形龍頭卷價九十五圓ヨリ百七十圓迄●同中硝子價七十五圓ヨリ百二十圓迄●十四金無双中硝子價五十五圓ヨリ七十五圓迄●同片硝子價四十圓ヨリ六十圓迄●十八金無双裏三枚蓋七曜月日指シ月ノ滿欠十二月及引打付價二百五十圓ヨリ四百五十圓迄◉米國製十八金廿一形無双中蓋付龍頭卷價百二十圓ヨリ百五十圓迄●同十四金價五十五圓ヨリ九十五圓迄●同十六形價六十五圓ヨリ八十五圓迄

鍍側

●無双裏三枚蓋廿一形龍頭卷價二十三圓ヨリ七十五圓迄●同片硝子價十五圓ヨリ三十五圓迄●同片硝子裏三枚蓋二十圓ヨリ六十五圓迄●同片硝子九圓ヨリ卅三圓迄●同片硝子器械シリン價七圓ヨリ八圓五十錢迄●無双裏三枚蓋廿一形引打付價八十圓ヨリ二百五十圓迄●同片硝子價七十五圓ヨリ百七十五圓迄●同コロノカラフ付白七十五圓ヨリ二百五十圓迄●同コロノメートル價六十圓ヨリ八十五圓迄◉米國製廿一形無双中蓋付龍頭卷價十八圓ヨリ三十五圓迄●同片硝子價十六圓ヨリ十七圓五十錢迄

金著側

●米國製廿一形無双中蓋付龍頭卷價二十三圓ヨリ五十五圓迄●同十六形十八圓ヨリ三十五圓迄

銀七寶

●瑞西國製銀七寶側裏二枚廿一形龍頭卷價廿圓ヨリ卅五圓迄●同四十圓ヨリ五十五圓迄

鐵側

●瑞西國製片硝子二十一形龍頭卷價五圓ヨリ八圓迄●同九圓ヨリ十二圓迄

白銅側

●瑞西國製片硝子廿一形龍頭卷價三圓ヨリ三圓五十錢迄●米國製廿一形片硝子價六圓五十錢ヨリ十二圓五十錢迄

大日本女學會

總裁小松宮妃殿下

副總裁鍋島侯爵夫人

●本會贊成員は有栖川宮大妃殿下 華頂宮妃殿下を始め奉り貴婦人方九十四名

趣旨

本會の趣旨は女子教育の普及發達を圖らむがため女學の講義録を發行し入學すべき女學校の設けなき土地に住める者又は父母のもとを離れ難き事情ある者をして居ながらに通信教授を受けしむるに在り其講義は極めて平易懇到を旨とし實踐の用に應じ輕佻の風を避け以て賢貞淑の品性を涵養せむことを期すされば此講義録は學ぶべきよすがなき者の師友となり一家の主婦として齊家保育の任に當る者の指針となり女學校に入學し居る者にも參考として適當なり●本會は明治廿八年の創立にして三千の會員已に第一回の講修を終りたれば今や新に學科を增設し紙面を刷新し更に第二回講修期を開き新に志ある淑女達とく入會あれかし何時入會あるも第壹卷より送本差支なし●本會講義録は女學講義と稱し長くも 皇后陛下叡覽を給ひ特に大御歌下賜の光榮を辱うす一卷の紙數菊判二百頁以上の優美なる大冊子にして毎月廿五日發行す總て講義の質問に答へ歌文習字の添削批評をも爲す●會費一箇月三十錢束修三十錢●會則希望者は郵券貳錢添へて申込みあれ

會員を募集す

學科及び講師

●修身（女子修身談）細川華族女學校長が從來同校に於て演說せられたるものに係る（禮法）佐方女子高等師範學校教諭●國語（國文）關根學習院教授（作歌）大口御歌所錄事（作文文法）今泉城北中學校長●漢文、土屋華族女學校教授●歷史（日本歷史萬國歷史）大森文學士●地理（日本地理萬國地理）喜田文學士（地文）脇水理學士●理科（物理化學）近藤工學士（博物）石川理學博士（生理衛生）未定●家事（家庭教育）三輪田高等女學校講師（家事經濟）後閑女子高等師範學校教諭（家事衛生）三宅醫學博士（小兒衛生）三島醫學士●割烹、御園華族女學校教員●小兒心理學、下田文學士●裁縫、渡邊東京裁縫學校長●習字、坂華族女學校教授●音樂、未定●手藝（活花點茶）田邊東京女學館講師

附錄

●史叢、下田華族女學校學監●小說、逍遙學海紅葉三大家●お伽譚漣山人●詞藻●質問應答●雜錄●雜報

◎目下第七卷迄發行せり

東京市麹町區土手三番町二十八番地

大日本女學會

（明治廿五年十月十四日遞信省認可）（明治卅一年六月十五日發兌）

東京市京橋區西紺屋町廿六七番地株式會社秀英舍印行